

專門基礎科目

授業科目名	古美術研究（日本画） Ancient Art Researches			
教員名	日本画科教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方（主に京都・奈良）を中心に、2週間の古美術研究旅行を行う。

■授業計画及び内容

実施時期は。

【3年次に実施】

日本画
油画
工芸
デザイン
建築
先端芸術表現

【2年次に実施】

彫刻
芸術学

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	古美術研究（油画） Ancient Art Researches			
教員名	油画科教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方（主に京都・奈良）を中心に、2週間の古美術研究旅行を行う。

■授業計画及び内容

実施時期は。

【3年次に実施】

日本画
油画
工芸
デザイン
建築
先端芸術表現

【2年次に実施】

彫刻
芸術学

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	古美術研究（彫刻） Ancient Art Researches			
教員名	彫刻科教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方（主に京都・奈良）を中心に、2週間の古美術研究旅行を行う。

■授業計画及び内容

実施時期は。

【3年次に実施】

日本画
油画
工芸
デザイン
建築
先端芸術表現

【2年次に実施】

彫刻
芸術学

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	古美術研究（工芸） Ancient Art Researches			
教員名	工芸科教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方（主に京都・奈良）を中心に、2週間の古美術研究旅行を行う。

■授業計画及び内容

実施時期は。

【3年次に実施】

日本画
油画
工芸
デザイン
建築
先端芸術表現

【2年次に実施】

彫刻
芸術学

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	古美術研究（デザイン） Ancient Art Researches			
教員名	デザイン科教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方（主に京都・奈良）を中心に、2週間の古美術研究旅行を行う。

■授業計画及び内容

実施時期は。

【3年次に実施】

日本画
油画
工芸
デザイン

建築
先端芸術表現

【2年次に実施】

彫刻
芸術学

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	古美術研究（建築） Ancient Art Researches			
教員名	建築科教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方（主に京都・奈良）を中心に、2週間の古美術研究旅行を行う。

建築科所属学生においては、絵画・彫刻・工芸などの様々な領域の古美術自体を鑑賞するのみならず、建築との関係でその魅力を体得して欲しい。

■授業計画及び内容

建築科所属学生は、3年次の10月第1週及び第2週に実施する（日程の都合で9月末開始となる場合もある）。

■受講に当たっての留意事項

9月中に、事前説明会を実施するので必ず参加すること。なお見学先の社寺等に十分配慮し、適切な服装や持参品などに心がけること。

■成績評価方法

出席及びレポートによる。

■教科書／参考書

旅行中は、配布する『古美術研究手引』を常時携帯し、必要に応じて参照すること。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	古美術研究（先端芸術表現） Ancient Art Researches			
教員名	先端芸術表現教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方（主に京都・奈良）を中心に、2週間の古美術研究旅行を行う。

■授業計画及び内容

実施時期は。

【3年次に実施】

日本画
油画
工芸
デザイン

建築
先端芸術表現

【2年次に実施】

彫刻
芸術学

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	古美術研究（芸術学） Ancient Art Researches			
教員名	芸術学科教員			
開講時期	集中		単位	10
履修対象	学部生			
特記事項	学事暦参照			

■授業テーマ

近畿地方を中心とする古美術研究旅行、見学作品の研究発表。

■授業計画及び内容

2年次の秋に近畿地方（主に京都・奈良）を中心とする古美術研究の旅行を実施する。また、旅行に先立ち、前期金曜2時限に、見学予定作品の中から学生が各自テーマを選び、順次発表を行って、教員が指導する。

■受講に当たっての留意事項

- 1、芸術学科2年生は必ず履修すること。
- 2、単位数は現地旅行を含む「古美術研究」全体のもの。
- 3、出席重視。遅刻厳禁。

■成績評価方法

演習発表の内容、現地旅行、レポート（2回）、及び平常点。

■教科書／参考書

東京芸術大学美術学部編『近畿地方を中心とする古美術見学手引き』

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	図学 I Graphic Science I			
教員名	面出 和子			
開講時期	通年	木曜 3	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

ある形を言葉で説明しようとする大変ですが、図では容易に伝達できることがあります。言語に対して語学があるように、図学は図のための学問です。図学は理論的に形を追求しながら、3次元の立体を2次元の平面に移すことを主な課題としています。形の表現は、造形制作では主観的になりがちですが、図学では客観的にあわします。この授業では、造形の視点から様々な平面図形や各種立体・空間を取り上げ、作図を通して、それらの形態の性質、作図法、表示法を考えていきます。また、立体の表示法の観点から、製図の基礎と、空間表現の各種方法、透視図の基礎を取り上げます。様々な図形・形態や空間について考え理解すること、それらを表現し伝達する手法を学ぶことが、この授業の目的です。

■授業計画及び内容

〈前期〉図学の考え方について／作図の基本／投象の概念／直線・多面体・曲面の投象／
展開／切断と断面／立体の相関 等
〈後期〉単画面投象について／軸測投象／斜投象／透視投象／絵画空間とその表現について 等
上記の各項目について、作図を通して関係する問題について考察します。また、各項目に関わる美術作品を紹介し解説します。

■受講に当たっての留意事項

この科目は、作図を通して理解を深めることになるので、作図のための用具（作図に適した鉛筆、消しゴム、コンパス、三角定規等）を毎回持参すること。毎回の授業は、前回からの積み上げになるので、できるだけ復習をしてください。また遅刻しないこと。

■成績評価方法

出席状況と、授業中の作図を平常点として評価する。その平常点と、前期試験と後期試験の成果を総合して、通年の成績評価とする。また授業回数の2/3の出席を単位取得の最低条件とする。

■教科書／参考書

テキスト：小山清男、面出和子 『造形の図学』（日本出版サービス）
また、必要に応じてプリントを配布します。
参考書：日本図学会編『図形科学ハンドブック』（森北出版）
日本図学会編『図学用語事典』（森北出版）
面出和子、他『遠近法と絵画』（美術出版社）

■備考（オフィスアワー）

授業後に質問を受け付けます。

授業科目名	図学 II（取手） Graphic Science II			
教員名	たほ りつこ			
開講時期	集中		単位	4
履修対象	美術・音楽学部生			
特記事項				

■授業テーマ

図は美術のみならず視覚言語の重要な位置を占めている。図は描かれたものの形・位置・関係を人に伝えるとともに、解釈を通じて内容や意味を伝える。現代においては科学や技術による多様な図の表現が展開されている。人間の視覚・知覚の科学的分析、認知のメカニズムと心理、視覚情報と図法、多様な図法など、現代科学技術の変化とともにひろがる図の在り方を紹介する。また、現在の領域横断研究から、さまざまな時代の芸術にみられる美と図について触れると共に、同じ図が条件や時間、環境変化によって異なる知覚と心理的效果をもたらす芸術表現となるかを学ぶ。演習課題として、基本的な幾何学及び図法と製図、2次元と3次元の演習をおこなう。

■授業計画及び内容

第一日 講義1：視覚と知覚、生態学的視覚 演習課題
第二日 講義2：幾何学図形（平面）錯視 演習課題
第三日 講義3：幾何学図形（立体）不可能な図形 演習課題
第四日 講義4：投影図、遠近法、透視図法 演習課題
第五日 講義5：多次元の変化を捉える図法 パラドックス 演習課題
第六日 講義6：図と多様な芸術表現 I 演習問題
第七日 講義7：図と多様な芸術表現 II 演習問題

■受講に当たっての留意事項

- ・筆記用具、製図道具（定規、三角定規、コンパス、シャープペンシル、消しゴム等）持参のこと。
- ・受講参加者でメールアドレスがある人は登録すること。
- ・事前に説明会を開きますので必ず参加すること。
- ・材料費を徴収します。
- ・課題はすべて授業日に終了し、自宅作業はありません。

■成績評価方法

授業での課題提出物によって評価します。

■教科書／参考書

脳は絵をどのように理解するか（ロバートソルソ 新潮社）、図形科学（朝倉書店・宮崎・小高著）美を脳から考える（共著 新曜社）美の図学（日本図学会編）、エッシャーの宇宙（ブルーノエルンスト朝日新聞社出版局）

■備考（オフィスアワー）

授業終了後、コンタクトを取ってください。

授業科目名	塑造（取手） Modeling (Intensive course)		
教員名	本郷 寛		
開講時期	集中	単位	4
履修対象	学部生		
特記事項			

■授業テーマ

塑造による頭像制作。
石膏取りを行い、期間内に石膏像として完成する。

■授業計画及び内容

塑造実習

- ・彫刻について
- ・デッサンについて
- ・心棒について
- ・塑造について
- 石膏取り
- ・用具について
- ・石膏取り（雌型）
- ・ " （雄型）

■受講に当たっての留意事項

- ・出席を重視します。
- ・6月下旬に行われるガイダンスに必ず出席すること。
- ・履修希望が多い場合、抽選になることが有ります。

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

美術教育研究室 050-5525-2266（内 3910）

授業科目名	工芸制作実習 Craft Work Making		
教員名	豊福 誠、篠原 行雄、原口 健一		
開講時期	集中	単位	6
履修対象	学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

鍛金・陶芸・木工の実習制作

■授業計画及び内容

- ・鍛金：当て金、金錠等を用いた銅板による器物などの制作
- ・陶芸：手びねりによる器の成形・素焼・絵付け・施釉・本焼成
- ・木工：「くりもの」による器などの制作

■受講に当たっての留意事項

6月中に行うガイダンスに出席すること。
履修希望が多数の場合、抽選等になることも有ります。（鍛金、木工）

■成績評価方法

出席、学習評価、提出作品

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

毎週月曜 14:00～16:00 美術教育研究室、木工室

授業科目名	日本美術史概説 Introduction to Japanese Art History			
教員名	松田 誠一郎			
開講時期	通年	水曜 4	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

日本彫刻史概説

■授業計画及び内容

飛鳥時代前期から平安時代後期にいたる仏教彫塑の歴史を概観する。講義は、毎回史料を講読して各作品の制作背景をあとづける一方、造形・技法の特徴や変遷について解説する。

また、中国や朝鮮半島の作品との比較を通して、日本的な美意識の問題についても論及する。

【前期】

- 1 ガイダンス
- 2-3 法隆寺金堂の釈迦三尊像
- 4-5 救世観音像と百済観音像
- 6-7 中宮寺の半跏思惟像
- 8-9 興福寺仏頭と薬師寺金堂本尊像
- 10-11 法隆寺五重塔の塑像群
- 12-13 興福寺の八部衆・十大弟子像
- 14-15 予備日

【後期】

- 1-2 東大寺法華堂の不空絹索観音像
- 3-4 唐招提寺の乾漆像・木彫像
- 5 神護寺の薬師如来像
- 6-7 東寺講堂の諸像
- 8-9 観心寺の如意輪観音像
- 10-11 室生寺金堂の本尊像
- 12-13 平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像
- 14-15 予備日

■受講に当たっての留意事項

1. 毎回出席をとる。
2. 講義内容は、古美術見学旅行と関係する。
3. 講義は教科書にそって進め、試験も教科書から出題する。

■成績評価方法

後期末（1月）に実施する試験の成績を基準に、出席率を考慮して総合的に評価する。

■教科書／参考書

教科書＝水野敬三郎著『奈良・京都の古寺めぐり ― 仏像の見かた一』、1985年、岩波書店。

参考書＝水野敬三郎監修『カラー版 日本仏像史』、2001年、美術出版社。

■備考（オフィスアワー）

水曜日 16:30～18:00 上野校地中央棟3F 松田研究室

授業科目名	日本美術史概説（取手） Introduction to Japanese Art History			
教員名	須賀 みほ			
開講時期	通年	金曜 1	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

【前期】

“空間、の画面形式―16世紀以降

【後期】

“時間、の画面形式―15世紀以前

■授業計画及び内容

かつての日本では、時間と空間は「間」という一つの語で言いあらわされていた。本講義では、大きく前半を近世の空間の構築、後半を中世の時間の理念とし、日本の造形文化の変遷、そこに形成されてきた独自の感覚について、各時代の作品から考察する。

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

出席と平常点、およびレポートで評価する。

■教科書／参考書

講義中に適宜紹介する。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	美学概論 Introduction to aesthetics			
教員名	松尾 大			
開講時期	通年	金曜 3	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

美学の体系的概説

■授業計画及び内容

授業の目的は、美と藝術についての基本的知識の習得と、基本的問題についての思考能力の養成である。その方法は、下記の教科書の各節ごとに私がコメントを述べたあと、そこに含まれる問題を提示し、授業参加者にその問題を考えてもらうというものである。

進度は、教科書の一つの章を一回の授業にあてることを原則とする。各章の内容は以下の通り。

- I 基礎的な諸概念
 - 1 美学
 - 2 美
 - 3 自然美
 - 4 芸術
- II 生産に関する諸概念
 - 5 模倣
 - 6 表現
 - 7 即興
 - 8 図式
 - 9 想像力
 - 10 天才
 - 11 創造／創造性
- III 対象に関する概念
 - 12 かたち
 - 13 修辭的文彩
 - 14 様式
 - 15 象徴
 - 16 作品
 - 17 美的質／美的範疇
 - 18 価値
- IV 消費と再生産に関する諸概念
 - 19 美的態度
 - 20 趣味
 - 21 美的判断
 - 22 解釈
 - 23 批評
 - 24 美的体験
 - 25 コミュニケーション

■受講に当たっての留意事項

ときにはバズグループによる議論の形式なども用いる。

■成績評価方法

出席 50% 前期試験 25% 後記試験 25%

■教科書／参考書

佐々木健一『美学辞典』東京大学出版会、1995

■備考（オフィスアワー）

随時（予約を取るごと）

授業科目名	東洋美術史概説 Introduction to East Asian Art History			
教員名	片山 まび			
開講時期	通年	火曜 5	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

中国絵画の展開を基本とし、韓国・朝鮮、日本との関係についても学ぶ。

■授業計画及び内容

[前期] 原始～10世紀の東アジアの美術の展開を概観し、基礎知識を学ぶ。

- 1: ガイダンス
- 2: 原始時代の土器
- 3: 青銅器と動物表現
- 4: 樹木表現の登場
- 5: 漆絵と時間表現
- 6: 兵馬俑と秦代の美術
- 7: 昇仙図と漢代の美術
- 8: 孝子図と南北朝時代の美術
- 9: 高句麗壁画古墳
- 10: 高句麗・百濟美術の山水表現
- 11: 唐代における樹石と山水（1）
- 12: 唐代における樹石と山水（2）
- 13: 五代と契丹の山水画
- 14: 予備日
- 15: 予備日

[後期] 11～14世紀の東アジア美術の展開を概観し、基礎知識を学ぶ。

- 1: ガイダンス
- 2: 五代と契丹の山水画・花鳥画
- 3: 北宋時代の山水画（1）
- 4: 北宋時代の山水画（2）
- 5: 北宋時代の文人画
- 6: 北宋時代の花鳥画・人物画
- 7: 南宋時代の山水画（1）
- 8: 南宋時代の山水画（2）
- 9: 南宋時代の絵画と日本
- 10: 元代の山水画
- 11: 元代の花鳥画・人物画
- 12: 宋・元代の絵画と高麗・朝鮮時代の絵画
- 13: 予備日
- 14: 予備日
- 15: 予備日

■受講に当たっての留意事項

授業中に複製品を用いることがあるので、ハンカチを持参すること。

■成績評価方法

出席とレポートによる。

■教科書／参考書

授業中に適宜指示。

■備考（オフィスアワー）

都度相談のこと。

授業科目名	西洋美術史概説 I Introduction to western art history I			
教員名	田邊 幹之助			
開講時期	前期	火曜 3	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

西洋美術史の前半、主として中世の美術を取り上げます。とりわけ中世美術が古代美術をどのように取り込み、どのように独自の変容を遂げたかを中心に作品を見てゆきます。

■授業計画及び内容

- 1) ガイダンス
- 2) 初期キリスト教美術 I
- 3) 初期キリスト教美術 II
- 4) ビザンチン美術 I
- 5) ビザンチン美術 II
- 6) ビザンチン美術 III
- 7) 6-8世紀の西欧の美術 I
- 8) 6-8世紀の西欧の美術 II
- 9) カロリング朝美術 I
- 10) カロリング朝美術 II
- 11) オットー朝美術 I
- 12) オットー朝美術 II
- 13) 盛期中世の始まり

■受講に当たっての留意事項

今年度は西洋美術史概説 I (前期) と II (後期) が開講される (各 2 単位)。通年 4 単位相当が必要な場合には、年度当初の理由登録時に必ず両方を登録しておくこと。後期分の登録を忘れても、あとから追加登録できないので注意すること。なお、I、II、III のうち二つを複数年度にまたがって履修することも可能だが、同一教員の担当授業を 2 度重複して単位を取ることはできない。

■成績評価方法

出席とレポート

■教科書／参考書

千足伸行『西洋美術史』西村書店、1999年

■備考 (オフィスアワー)

メールで予約を取ってください。

tanabe@fa.geidai.ac.jp

授業科目名	西洋美術史概説 II Introduction to western art history II			
教員名	越川 倫明			
開講時期	後期	火曜 3	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

前期に引き続き西洋美術史の概説を行ないます。扱う時代的範囲はおおよそ中世後期から 17 世紀とし、主としてイタリア絵画の動向を見ていきます。それぞれの時代の美術の根本的な特性や美術家の関心の方向性を把握することに主眼を置きます。

■授業計画及び内容

- 1) ガイダンス
- 2) 絵画のタイプと技法の概略
- 3) ジョットを中心としたイタリア・ゴシック絵画の動向
- 4) 幾何学的遠近法の発見
- 5) 15世紀イタリア画家たちの動向
- 6) ファン・エイクを中心とした 15 世紀ネーデルランド絵画の動向
- 7) レオナルド・ダ・ヴィンチ
- 8) ミケランジェロ
- 9) ラファエッロ
- 10) ヴェネツィア絵画の動向
- 11) マニエリスム美術
- 12) バロック美術
- 13) 試験

■受講に当たっての留意事項

今年度は西洋美術史概説 I (前期)、II (後期) が開講される (各 2 単位)。通年 4 単位相当が必要な場合には、年度当初に必ず両方に登録しておくこと。後期分の登録を忘れても、あとから追加登録はできないので、注意すること。なお、I、II、III のうち 2 つを複数年度にまたがって履修することも可能だが、同一教員の担当授業を 2 度重複して単位をとることはできない。なお、芸術学科学部 1 年生は必修科目である。

■成績評価方法

出席 50%、試験 50%

■教科書／参考書

M・フイエ『イタリア美術』(白水社文庫クセジュ)

B・コール『ルネサンスの芸術家工房』(ペリかん社)

千足伸行監修『新西洋美術史』(西村書店)

■備考 (オフィスアワー)

木曜 12:40 ~ 14:40 (ただし、メールで要予約)

授業科目名	西洋美術史概説 I (取手) Introduction to western art history I			
教員名	田邊 幹之助			
開講時期	前期	金曜 2	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

西洋美術史の前半、主として中世の美術を取り上げます。とりわけ中世美術が古代美術をどのように取り込み、どのように独自の変容を遂げたかを中心に作品を見てゆきます。

■授業計画及び内容

- 1) ガイダンス
- 2) 初期キリスト教美術 I
- 3) 初期キリスト教美術 II
- 4) ビザンチン美術 I
- 5) ビザンチン美術 II
- 6) ビザンチン美術 III
- 7) 6-8世紀の西欧の美術 I
- 8) 6-8世紀の西欧の美術 II
- 9) カロリング朝美術 I
- 10) カロリング朝美術 II
- 11) オットー朝美術 I
- 12) オットー朝美術 II
- 13) 盛期中世の始まり

■受講に当たっての留意事項

今年度は西洋美術史概説 I (前期) と II (後期) が開講される (各 2 単位)。通年 4 単位相当が必要な場合には、年度当初の理由登録時に必ず両方を登録しておくこと。後期分の登録を忘れても、あとから追加登録できないので注意すること。なお、I、II、III のうち 2 つを複数年度にまたがって履修することも可能だが、同一教員の担当授業を 2 度重複して単位を取ることはできない。

■成績評価方法

出席とレポート

■教科書／参考書

千足伸行『西洋美術史』西村書店、1999年

■備考 (オフィスアワー)

メールで予約を取ってください。
tanabe@fa.geidai.ac.jp

授業科目名	西洋美術史概説 II (取手) Introduction to western art history II			
教員名	越川 倫明			
開講時期	後期	金曜 2	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

前期に引き続き西洋美術史の概説を行ないます。扱う時代的範囲はおおよそ中世後期から 17 世紀とし、主としてイタリア絵画の動向を見ていきます。それぞれの時代の美術の根本的な特性や美術家の関心の方向性を把握することに主眼を置きます。

■授業計画及び内容

- 1) ガイダンス
- 2) 絵画のタイプと技法の概略
- 3) ジョットを中心としたイタリア・ゴシック絵画の動向
- 4) 幾何学的遠近法の発見
- 5) 15世紀イタリア画家たちの動向
- 6) ファン・エイクを中心とした 15世紀ネーデルランド絵画の動向
- 7) レオナルド・ダ・ヴィンチ
- 8) ミケランジェロ
- 9) ラファエッロ
- 10) ヴェネツィア絵画の動向
- 11) マニエリスム美術
- 12) バロック美術
- 13) 試験

■受講に当たっての留意事項

今年度は西洋美術史概説 I (前期)、II (後期) が開講される (各 2 単位)。通年 4 単位相当が必要な場合には、年度当初に必ず両方に登録しておくこと。後期分の登録を忘れても、あとから追加登録はできないので、注意すること。なお、I、II、III のうち 2 つを複数年度にまたがって履修することも可能だが、同一教員の担当授業を 2 度重複して単位をとることはできない。

■成績評価方法

出席 50%、試験 50%

■教科書／参考書

M・フイエ『イタリア美術』(白水社文庫クセジュ)
B・コール『ルネサンスの芸術家工房』(ペリかん社)
千足伸行監修『新西洋美術史』(西村書店)

■備考 (オフィスアワー)

木曜 12:40 ~ 14:40 (ただし、メールで要予約)

授業科目名	美術解剖学 A Artistic anatomy A			
教員名	布施 英利			
開講時期	通年	水曜 4	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

人体についての講義である。
前期は骨について、後期は筋肉について学ぶ。
美術の創造のために、また美術作品の鑑賞や研究のための力をつけることを目指す。

■授業計画及び内容

1. 解剖学とは何か
2. ヒトの骨の概観
3. 脊柱の構造
4. 胸郭の形態
5. 下肢の骨と「立つ」こと
6. 上肢の骨と動き
7. 体幹の筋肉
8. 下肢の筋肉
9. 上肢の筋肉
10. 頭部の骨と筋肉、顔の表情
上記のような内容についての講義を行う。

■受講に当たっての留意事項

ノートは必携である。筆記具も充実したものを持参してほしい。

■成績評価方法

出席とレポート

■教科書／参考書

参考書として「イラストで学ぶ美術解剖学」(布施英利訳、グラフィック社) など

■備考 (オフィスアワー)

月・水・木

授業科目名	美術解剖学 B Artistic anatomy B			
教員名	布施 英利			
開講時期	通年	月曜 3	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

人体や動物、植物、その他自然の形態についての授業である。美術解剖学 A のさらに応用的な内容となる。美術の創造のために、また美術作品の鑑賞や研究のための力をつけることを目指す。

■授業計画及び内容

1. ヒトの体についての復習
2. 霊長類の形態
3. 哺乳類の体
4. 魚の体と海
5. 無脊椎動物の魅力
6. 樹木の見方
7. 苔と庭園
8. 雲の観察
9. 空と光
上記の内容についての講義を行う。

■受講に当たっての留意事項

ノートは必携である。筆記具も充実したものを持参してほしい。

■成績評価方法

出席とレポート

■教科書／参考書

■備考 (オフィスアワー)

月・水・木

授業科目名	美術解剖学 A (取手) Artistic anatomy A			
教員名	宮永 美知代			
開講時期	通年	水曜 2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

人間とは何か？

人体の外形と内部構造の関係の学びは、ルネサンス以降、美術に不可欠な素養とされてきた。

美術表現が多様化した現在においても、人が生み出すかたちは本質的にヒトとしての身体感に起因するものであろう。

人のかたちと動きの学び、進化の学びを通して、自らのものの見方を広げ、各々の造形表現の深化に結びつく内容としたい。

授業の内容は、人体の運動機構（骨格と筋）を柱としつつも、かたちの由来（進化・比較解剖学）、動きに伴う形態変化を講述する。さらに、造形表現された人体像の美性について論じる。

■授業計画及び内容

1. 美術解剖学とは何か？（＝美術解剖学小史）
2. 外貌学 差異（性）
3. 差異（年齢）
4. 差異（環境）
5. 運動機構総論 骨学総論
6. 筋学総論
7. 運動機構各論 体幹の動き（脊柱）
8. 胸郭）
9. 脊柱を動かす筋（脊柱起立筋・腹筋）
10. 呼吸に関与する筋
11. 上肢の動き（上肢帯）
12. 自由上肢骨）
13. 上肢を動きに関与する筋（体幹→上肢帯・上肢帯→上腕）
14. 上肢を動かす筋（上腕→前腕・前腕→手）
15. 手の動き
16. 下肢の動き（下肢帯）
17. 自由下肢骨）
18. 下肢を動かす筋（下肢帯→大腿骨）
19. 大腿骨→下腿・下腿→足）
20. 足の動き
21. 頭部の動き（頭蓋 構成と年齢差）
22. 頭蓋 性差、時代差、人種差）
23. 表情筋と表情）
24. まとめ

■受講に当たっての留意事項

解剖図を板書するので、ノートの際に色鉛筆が必要です。

この講義の単位を取得した者は、美術解剖学 A (上野) の単位は取得できません。

■成績評価方法

授業に臨む姿勢、及び、レポートによる評価。

■教科書／参考書

特に定めない。

参考書 ・中尾喜保・宮永美知代著、『美術解剖学アトラス』、南山堂、1986

・宮永美知代著、『美女の骨格』、青春出版新書、2009

■備考（オフィスアワー）

水曜日の授業後、もしくは上野校地で随時。

TEL : 050-5525-2273 fax 050-5525-2499

email : michiyo.miyanaga@gmail.com

授業科目名	彫刻概論 I (取手) History of Modern Sculpture I			
教員名	中西 麻澄			
開講時期	前期	月曜 2	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

古代から近世までのヨーロッパを中心とした地域および日本の彫刻を広く概説するとともに、それぞれの時代、地域における造形の本質について考察する。

■授業計画及び内容

毎回、テーマとする時代や作品データをまとめた資料を配布し、多くの作品をスライドで紹介しします。

- 1) ガイダンス及び参考文献案内
- 2) 原始の彫刻
- 3) 古代エジプト
- 4) 古代ギリシア (1)
- 5) 古代ギリシア (2)
- 6) 古代ローマ (1)
- 7) 古代ローマ (2)
- 8) 中世ヨーロッパ (ロマネスク)
- 9) 中世ヨーロッパ (ゴシック)
- 10) ルネサンス (1)
- 11) ルネサンス (2)
- 12) 日本 1 (飛鳥、白鳳、天平)
- 13) 日本 2 (平安)
- 14) 日本 3 (鎌倉)

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

出席、授業中に課す小論文、期末テストにより総合的に評価

■教科書／参考書

授業中に適宜、紹介する

■備考（オフィスアワー）

授業終了後 / mnakani@fa.geidai.ac.jp

授業科目名	彫刻概論Ⅱ（取手） History of Modern Sculpture II			
教員名	小泉 晋弥			
開講時期	後期	金曜 1	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

概要：ロダンから20世紀後半までの主要な彫刻作品と作家の思想を検討し、20世紀彫刻を概観することを通して、彫刻芸術の特性について考察する。20世紀彫刻家や作品の抱える問題から、21世紀の芸術への視点についてのヒントを得ていきたい。
目標：主要な彫刻家がそれぞれの作品において何を実現しようとしたかを理解できる。彫刻を語る思想について20世紀前半と後半との違いを説明できる。

■授業計画及び内容

- 1 彫刻とは何か○絵画との比較の歴史
- 2 19世紀彫刻とロダン
- 3 ロダンへの新しい視点
- 4 20世紀彫刻の転換1 形態そのものの造型原理
- 5 20世紀彫刻の転換2 表現主義とキュビズム
- 6 20世紀彫刻の転換3 未来派と構成主義 空間と時間の統合＝分裂
- 7 近代「彫刻」の始まりと消えた生人形
- 8 ダダイズム 理性への疑念
- 9 レディメイド＝20世紀の造形とデュシャン、ブランクーシ
- 10 シュルレアリスム ジャコモメッティ・カルダー・ムーア
- 11 再興院展と木彫の再認識
- 12 戦前-戦後の具象彫刻
- 13 ムーア、ジャコモメッティの場所
- 14 アースワークとボイス以後
- 15 まとめ：モダニズム、ポスト・モダニズムを超えて

■受講に当たっての留意事項

授業の最後に感想や疑問等を書く小レポート用紙を配布するが、それについてA B C Dの採点をして最後のレポートと合算するのできちんと記入すること。

■成績評価方法

レポート（60%）授業での小レポート（40%）

■教科書／参考書

ハーバート・リード『彫刻とは何か』（日貿出版）、同『近代彫刻史』（藤原えりみ訳、言叢社）、Rosaling E. Krauss "Passages in Modern Sculpture"

■備考（オフィスアワー）

メールで対応 koizumi@mx.ibaraki.ac.jp

授業科目名	絵画創作概論 The Theory of Picture Creating			
教員名	油画教員			
開講時期	前期	水曜 5	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

油画の創作の基礎となる「絵画」「表現」についての授業を、油画教員の実際の制作に即して各教員の考えや作品を紹介しながら、開講科目のなかで毎年続けて実施する。そのことにより、油画の創作における、表現の展開、実験的な例、ドローイングから制作までのプロセス等、そこでの思考や活動の変遷を示し、油画専攻の創作の基礎（ベース）となる考え方を、油画の学生だけではなく、広く他科の学生にも受講することが出来る。

■授業計画及び内容

- 1) 中村 政人 現代美術演習 コマーシャル×オルタナティブ (4/17・4/24)
- 2) 0 JUN 「絵を描くということーその異なるもの、あるいは異なるものについて」 (5/8・5/15)
- 3) 坂口 寛敏 ドローイングから絵画空間への展開ー無から有を生みー (5/22・5/29)
- 4) 齋藤 芽生 第一回目「制作ノート I・漂流感」第二回目「制作ノート II・理想郷」 (6/5・6/12)
- 5) 小林 正人 この星の絵の具～ LOVE もっとひどい絵を！ (6/19・6/26)
- 6) 小山 徳太郎 「イメージ」の断片化の先で、次元を行き交う表現についてードキュメンタリー、物語、歴史、絵画、写真、映像という媒体の考察からー (7/3・7/10)
- 7) 三井田 盛一郎 「自作と紙をめぐるスライドレクチャー」 (7/17・7/24)

■受講に当たっての留意事項

授業中に指示

■成績評価方法

出席・レポート提出 油画教員室へ8月末に提出

■教科書／参考書

授業中に指示

■備考（オフィスアワー）

授業中に指示

授業科目名	絵画技法史・絵画材料論（取手） History of painting technique and use of materials		
教員名	佐藤 一郎、秋本 貫透、木島 隆康		
開講時期	通年	火曜 1・2	単位 8
履修対象	学部生		
特記事項			

出版社・「画材の博物誌」森田恒之著、中央公論美術出版・「The painter's Methods and Materials」A.P.Laurie 著、Dover「トンプソン教授のテンペラ画の実技」佐藤一郎監訳・三好企画

■備考（オフィスアワー）

水曜 午後 1：30～3：30 油画技法材料研究室（上野校地）

■授業テーマ

絵画材料論は西欧絵画技法史を踏まえて、支持体・地塗り・絵具層・ワニスと積み重なる油画の重層構造と、それらを構成する絵画材料について考察する。その前提となる「見ることの構造」を探り、光と色、形と空間について述べる。

絵画技法史は、テンペラから油彩への古典的絵画技術の展開を考察し、絵画技術・材料と表現の関わりについて述べ、絵具作り（顔料、油絵具）を実習する。絵画作品に対する保存と修復の実際を述べ近代日本の油画の特徴を考察する。

■授業計画及び内容

（前期）

佐藤

- 第1回 ガイダンス
- 第2回 見ること描くこと ①画の六法
- 第3回 見ること描くこと ②アリストテレスの形而上学
- 第4回 見ること描くこと ③浅井忠「写真の位置」
- 第5回 見ること描くこと ④フォンタネージ講義
- 第6回 光と色 ①ゲーテの色彩論
- 第7回 光と色 ②構図（コンポジション）
- 第8回 形と空間 ①色価（ヴァールール）
- 第9回 形と空間 ②比例（プロポーション）・遠近法（パースペクティブ）
- 第10回 形と空間 ③明暗法（キアロスクーロ）
- 第11回 顔料 ①着色力・被覆力
- 第12回 顔料 ②白色顔料・有色顔料・地塗り顔料
- 第13回 顔料 ③乾性油・吸油量・屈折率
- 第14回 顔料 ④乳濁液（エマルション）・テンペラ絵具
- 第15回 期末試験
- 第16回（予備）

（後期）

秋本

- 第1回 絵画技法史 ①絵画の歴史
- 第2回 絵画技法史 ②15世紀フランドル派 ヴァン・エイク
- 第3回 絵画技法史 ①16世紀ヴェネツィア派 ティツィアーノ
- 第4回 絵画技法史 ②17世紀フランドル派 ルーベンス/レンブラント
- 第5回 絵画材料 ①顔料製造実習 1/2
- 第6回 絵画材料 ②顔料製造実習 2/2
- 第7回 絵画材料 ①油絵具製造実習 1/2
- 第8回 絵画材料 ②油絵具製造実習 2/2
- 第9回 絵画材料 ③油絵具と溶き油
- 第10回 絵画材料 ④エマルション絵具
- 第11回 絵画材料 ⑤日本画の絵具
- 木島
- 第12回 絵画保存学 ①膠の製造
- 第13回 絵画保存学 ②絵画の修復 1/2
- 第14回 絵画保存学 ③絵画の修復 2/2
- 第15回 絵画保存学 ④明治前期（脂派）/後期（紫派）の絵画
- 第16回 学年末筆記試験

■受講に当たっての留意事項

資料プリントを配布する。前期筆記試験の時プリント・ノートを持参してかまわない。参考書等は持込み不可。

■成績評価方法

平常点と、前期および後期筆記試験によって評価する。

■教科書／参考書

（参）「絵画技術入門」佐藤一郎著、美術出版社・「絵画技術体系」マックス・デルナー著・佐藤一郎訳、美術出版社・「絵画技術全書」クルト・ヴェールテ著 佐藤一郎＋戸川英夫＋真鍋千絵、美術出版社・「絵画学入門」クヌート・ニコラウス著・黒江光彦監修、美術出版社・「絵画材料辞典」ゲッテンス、スタウト共著 森田恒之訳、美術

授業科目名	日本工芸史概説 Outline of Japanese craft works history			
教員名	原田 一敏			
開講時期	通年	火曜 4	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

日本の工芸史のなかで、とくに飛鳥時代にはじまる仏教工芸から明治時代の博覧会まで、それぞれの時代の特徴を示す工芸品について授業計画に添って概説する。

■授業計画及び内容

- ① 仏教工芸の世界
- ② 正倉院宝物
- ③ 武士の装い
- ④ 工芸の図案 — 和鏡を中心に—
- ⑤ 茶の湯の道具 — 唐物賞玩から侘び数寄へ—
- ⑥ 江戸の工芸
- ⑦ 近代工芸 博覧会と明治の工芸

■受講に当たっての留意事項

特になし。

■成績評価方法

出席率とテスト、レポートを主体とする。

■教科書／参考書

テキストは授業時に配布する。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	日本・東洋建築史 I History of Japanese and Asian architecture I			
教員名	光井 渉			
開講時期	前期	金曜 3	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

「日本・東洋建築史」は、日本列島で展開した建築と都市・集落について概観するもので、前期開講のⅠでは、主に中世以前の宗教建築と都市について扱います。講義はおおむね時代順に沿ったテーマを各回毎に設定し、代表的な建築作品等の紹介を通じて、多種多様な建築の形の意味とその背景にある技術の在り方を考えていきます。

■授業計画及び内容

各回のテーマは下記のものを用意しますが、進行状況に応じて適宜変更する可能性があります。

- 1 日本の建築（ガイダンス）
- 2 建築の誕生（原始住居の住居）
- 3 美意識の誕生（神社建築の形式）
- 4 技術と空間（飛鳥・奈良時代の寺院1）
- 5 空間の大型化と建築群（飛鳥・奈良時代の寺院2）
- 6 都市の誕生（平城京と平安京）
- 7 都市住宅の形（御所と寝殿造）
- 8 和様の感覚（平安時代の建築）
- 9 災害と復興（大仏様）
- 10 禅宗の建築（禅宗様）
- 11 中世的世界の建築（密教建築）
- 12 上野台地に残る歴史的建築
- 13 試験

■受講に当たっての留意事項

「日本・東洋建築史Ⅰ」と「日本・東洋建築史Ⅱ」は連続した内容であるので、二つを連続して受講することが望ましい。なお、デザイン科の選択必修単位にあてられる場合には、ⅠとⅡをともに履修すること。

■成績評価方法

学期末の試験による。

■教科書／参考書

教材（講義中に使用）：『日本建築史図集』（日本建築学会編、影国社）
参考図書：『建築デザイン用語辞典』（建築デザイン研究会編、井上書院）、『カラー版日本建築様式史』（美術出版）

■備考（オフィスアワー）

月曜日 17:30～ 総合工房 B 棟 4階 光井研究室（B-412 室）

授業科目名	日本・東洋建築史Ⅱ History of Japanese and Asian architecture II			
教員名	光井 渉			
開講時期	後期	金曜 3	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

「日本・東洋建築史」は、日本列島で展開した建築と都市・集落について概観するもので、後期開講のⅡでは、主に中世以後の住宅建築と都市・集落、庶民住居について扱います。講義はおおむね時代順に沿ったテーマを各回毎に設定し、社会的・技術的な背景とともに代表的な建築作品等を紹介し、現代の生活空間に継承されている多種多様な建築の形の意味を考えていきます。

■授業計画及び内容

各回のテーマは下記のを予定しますが、進行状況に応じて適宜変更する可能性があります。

- 1 舗設から部屋へ（中世住宅）
- 2 もてなしの空間（座敷飾りと書院造）
- 3 綺麗と数寄（茶室）
- 4 近世住宅の完成（数寄屋）
- 5 戦乱と惣構（中世京都と土豪屋敷）
- 6 権力の象徴（城郭建築）
- 7 現代都市の起源（城下町）
- 8 町に暮らす（町並と町家）
- 9 村に暮らす（農村と農家）
- 10 専用住居の誕生（武家住宅）
- 11 賑わいの空間（近世寺社境内）
- 12 芸大周辺の歴史的建築見学
- 13 試験

■受講に当たっての留意事項

「日本・東洋建築史Ⅰ」と「日本・東洋建築史Ⅱ」は連続した内容であるので、二つを連続して受講することが望ましい。なお、デザイン科の選択必修単位にあてる場合には、ⅠとⅡをともに履修すること。

■成績評価方法

学期末の試験による。

■教科書／参考書

教材（講義中に使用）：『日本建築史図集』（日本建築学会編、彰国社）
参考図書：『建築デザイン用語辞典』（建築デザイン研究会編、井上書院）、『カラー版日本建築様式史』（美術出版）

■備考（オフィスアワー）

月曜日 17:30～ 総合工房 B 棟 4 階 光井研究室（B-412 室）

授業科目名	西洋建築史Ⅰ History of European architecture I			
教員名	野口 昌夫			
開講時期	前期	月曜 3	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

古代ギリシャ、ローマの壮大な建築の規準となっていたオーダーがルネッサンス期以降になって再び力強く継承され、古典建築の言語体系が再構築されていく過程をバロック期まで見届ける。一方、キリスト教聖堂建築の流れとして、初期キリスト教建築とビザンティン建築からプレ・ロマネスクまでを概説する。

■授業計画及び内容

- 1 西洋建築史を学ぶにあたって
- 2 古代ギリシャ建築：神殿とオーダー
- 3 古代ギリシャ建築：アゴラの構成
- 4 古代ギリシャ建築：都市計画
- 5 古代ローマ建築：概説
- 6 古代ローマ建築：パンテオンとコロセウム
- 7 古代ローマ建築：ヴィラ・アドリアーナ
- 8 初期キリスト教建築・概説
- 9 初期キリスト教建築：ラヴェンナの聖堂
- 10 ビザンティン建築：概説
- 11 ビザンティン建築：ハギア・ソフィア
- 12 プレ・ロマネスク建築：概説

■受講に当たっての留意事項

授業で渡すプリント（B 4 サイズ）をファイルして保存すること。

■成績評価方法

出席回数と、前期のレポートおよび後期末の試験

■教科書／参考書

（参）「西洋建築史図表」 日本建築学会編 彰国社

■備考（オフィスアワー）

月曜日 15時～16時 建築理論第二 野口研

授業科目名	西洋建築史Ⅱ History of European architecture II			
教員名	野口 昌夫			
開講時期	後期	月曜 3	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

1000年以降のロマネスク、ゴシックに至る過程を追う。後期のルネサンス建築以降は、その主流をなすイタリア建築に重点を置き、ブルネレスキ、アルベルティ、ミケロツォから、ブラマンテ、ミケランジェロを経て、マニエリスム期のパラディオとジュリオ・ロマーノ、そしてバロック期のボロミーニ、ベルニーニ、グアリーニにいたる作品を概説する。

■授業計画及び内容

- 1 ロマネスク建築：概説
- 2 ロマネスク建築：イタリアのロマネスク聖堂
- 3 ゴシック建築：概説
- 4 ゴシック建築：フランスのゴシック聖堂
- 5 ゴシック建築：イタリアのゴシック聖堂
- 6 ルネサンス建築：初期ルネサンス
- 7 ルネサンス建築：盛期ルネサンス
- 8 マニエリスム：アンドレア・パラディオ
- 9 マニエリスム：ジュリオ・ロマーノ
- 10 バロック建築：フランチェスコ・ボロミーニ
- 11 バロック建築：ジャンロレンツォ・ベルニーニ
- 12 バロック建築：グアリーノ・グアリーニ

■受講に当たっての留意事項

授業で渡すプリント（B4サイズ）をファイルして保存すること。

■成績評価方法

出席回数と、前期のレポートおよび後期末の試験

■教科書／参考書

(参)「西洋建築史図表」 日本建築学会編 彰国社

■備考（オフィスアワー）

月曜日 15時～16時 建築理論第二 野口研

授業科目名	現代芸術論Ⅰ（美学特講） Lecture on Modern Art I (Special studies in aesthetics)			
教員名	村山 康男			
開講時期	後期	金曜 1	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項	振替措置			

■授業テーマ

現代芸術（美術の領域を中心とする）のあり方を、現代という時代や社会の観点から捉えなおして見たい。情報化と消費化がもたらす芸術の変容の在り方を認識することがこの授業の目的である。

■授業計画及び内容

現代芸術を現代という時代や社会のあり方から広く俯瞰してみると、情報化社会と消費（化）社会の諸問題が芸術のこれまでのあり方に根本的な変容をもたらしつつあることがわかる。現代社会を消費化と情報化のシステムとして捉えるとき、そこには近代が芸術の本質を個性や独創性といった概念で捉えていた地平とは別のものが垣間見えてくる。消費化の契機は作り手と受け手との関係を逆転し、個性や独創性の概念をその根底から穿つ。また情報化の契機は芸術の質的側面を空無化し、芸術の体験のあり方に変容を迫っている。

- 第1回 ガイダンス：情報化と消費化
- 第2回 デザイン・広告・カード
- 第3回 消費社会における美と芸術1：かわいいの美学
- 第4回 消費社会における美と芸術2：リアル・クローズとモードのファッション
- 第5回 消費社会における美と芸術3：かわいい建築
- 第6回 消費社会における美と芸術4：かわいいデザイン
- 第7回 消費社会における美と芸術5：珍しいきのこの舞踊団
- 第8回 モダンとポストモダン1：オリジナルとコピー
- 第9回 モダンとポストモダン2：物語消費とデータベース消費
- 第10回 モダンとポストモダン3：大きな物語と小さな物語
- 第11回 モダンとポストモダン4：奈良美智のキャラ萌えの世界
- 第12回 モダンとポストモダン5：石内都の《ひろしま》
- 第13回 モダンとポストモダン6：人間性の問題
- 第14回 モダンとポストモダン7：ゼロ年代の想像力
- 第15回 まとめ

■受講に当たっての留意事項

特になし。

■成績評価方法

授業内容に関するテーマでレポートを提出してもらいます。

■教科書／参考書

そのつど指示します。

■備考（オフィスアワー）

授業その他に関する質問は中央棟3階芸術学科美学研究室に問い合わせること。

授業科目名	工芸理論 Matters on craft and design			
教員名	片山 まび			
開講時期	通年	火曜 3	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

今日の工芸における「伝統」を守る制度・人・モノについて概観する。

■授業計画及び内容

日本の民藝、重要無形文化財、千家十職、伝統的工芸のほか、アジアにおける伝統工芸育成制度などについて講師のフィールドワークにもとづいて講義する。

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

出席6割、レポート4割とする。

■教科書／参考書

特に指定なし。

■備考（オフィスアワー）

都度相談。

授業科目名	デザイン概説 Design overview			
教員名	藤崎 圭一郎			
開講時期	通年	金曜 4	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

21世紀のデザインを考える。「エシカル」（倫理的）と「クリティカル」（批評的）という2つの軸から、デザイン思想とデザインの歴史を考察し、デザインの新たな社会的役割を受講者とともに考える。

■授業計画及び内容

1. デザインの定義 1
 2. デザインの定義 2
 3. ソーシャルデザイン
 4. オリビエーロ・トスカーニ
 5. 正直さとスタイリング
 6. ブランディング 1 - 無印良品とスウォッチ
 7. ブランディング 2 - 記号論
 8. 地場産業とデザイン（ゲスト講師）
 9. フラットランドとアブダクション
 10. 未来身体：サイボーグとユニバーサルデザイン
 11. インタラクションデザイン
 12. アフォーダンスと『茶の本』
 13. 遊びとデザイン
 14. スタイルとテイスト
 15. 二項対立
 16. 第三項（コモンについて）
 17. 第三項（PINK, ルイス・バラガン）
 18. デザインのミニマリズム（90年代のデザイン）
 19. ポストモダン（80年代のデザイン）
 20. イームズ
 21. 近代デザイン誕生 1
 22. 近代デザイン誕生 2
 23. バウハウス
 24. 日本デザイン史（戦後～）
 25. バッドデザイン 1（ゲスト講師）
 26. バッドデザイン 2（講評）
 27. ガンジーとアーツ&クラフツ
 28. AK-47
- 講義順は適宜入れ替えあり。

■受講に当たっての留意事項

デザイン科学部2年必修。

■成績評価方法

レポートと出席日数。出席重視。出席率50%以上に達しない者は原則として不可とする。

■教科書／参考書

なし

■備考（オフィスアワー）

火曜 12時～18時

金曜 13時～17時

授業科目名	色彩学 Science of Colours			
教員名	日比野 克彦			
開講時期	集中		単位	2
履修対象	美術・音楽学部生			
特記事項				

■授業テーマ

色彩には、さまざまな側面がある。科学的側面、心理的側面、絵画材料的側面、色彩光学の側面、また工学的側面などがある。特に近年は、色彩の再現技術がデジタルの技術によって進化したために、従来型の絵の具を中心とした色彩の扱いとは異なった問題が出てきているこれらの問題点についても検討を加えていく。

■授業計画及び内容

各分野で研究実践を進めるアーティスト、研究者を講師として招き、色彩学を多角的に捉える。

■受講に当たっての留意事項

予定：トータルカラー、スケッチブック、のり、はさみ等
 *詳細は、集中講義履修登録時に確認のこと。
 *詳細は、教務掲示板を確認のこと。
 *授業内容によって教材費を徴収することがあります。

■成績評価方法

出席、提出物等で総合的に判断を行う

■教科書／参考書

授業中に適宜指示する。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	日本金工史 Japanese metalwork history			
教員名	横溝 廣子、原田 一敏			
開講時期	通年	金曜 5	単位	4
履修対象	学部生			
特記事項	通年で4単位 前期：原田、後期：横溝			

■授業テーマ

日本金工の歴史を概説する。前期は飛鳥時代から江戸時代まで、各時代を代表する金工作品を概観し、時代的な特質、技術の変化などを講義する。後期は明治維新以降の社会情勢の中で変化した金工家の活動の展開を追う。

■授業計画及び内容

前期：日本金工の歴史、技法などをスライド使用して講義するほか、芸大美術館所蔵の作品や東京国立博物館の展示品を見ながら具体的に時代的特質、様式的変化をとらえ、造形や技法について講義する。後期：明治時代から武家社会の崩壊と生活の洋風化の中で方向転換を迫られた金工家たちの活動を様々な観点から捉える。昭和までの近代金工史上の代表的な出来事や作家について、できるだけ実物の作品を見ながら講義する。

■受講に当たっての留意事項

大学の教室のほか、東京国立博物館でも行うことがあるので、教務の掲示板をよく見ること。

■成績評価方法

平常点とレポートを主体とする。

■教科書／参考書

テキストは授業開始時に配布。

■備考（オフィスアワー）

前期：大学美術館 原田
 後期：大学美術館 横溝

授業科目名	漆工史 Lacquer history			
教員名	奥窪 聖美			
開講時期	通年	木曜 4	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

縄文時代から明治時代に至るまでの日本の漆工芸の歴史を漆芸技法の理解を深めながら概観する。各時代の他のジャンルの美術の変遷を合わせて眺めることで、時代ごとの漆工芸の存在位置を再認識できるようにする。また中国との交易が日本に与えた影響や16世紀半ば以降、西洋で日本の漆芸がどのように受容されていったのかについても見ていく。

■授業計画及び内容

1) 漆とは何か 2) 太古 3) 奈良時代 4) 平安時代前期 5) 平安時代後期 6) 鎌倉時代 7) 南北朝時代 8) 室町時代 9) 桃山時代 10) 南蛮美術 11) 江戸時代初期 12) 琳派 13) 輸出漆器 14) 江戸時代後期 15) 明治時代
まず上記の区分に沿って通史を追い、そのうち関連項目を掘り下げていくことにする。

■受講に当たっての留意事項

漆芸専攻学生は必修

■成績評価方法

出席率と試験またはレポートによる

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	東洋陶磁史 History of Oriental Ceramics			
教員名	片山 まび、唐沢 昌宏			
開講時期	通年	金曜 5	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

(前期)

いわゆる「名碗」について取り上げ、その歴史を学ぶ。

(後期)

近現代陶芸の歴史を学ぶとともに、近現代の動向および造形的思考を確認しつつ、「表現の工芸（陶芸）」についての理解を深める。

■授業計画及び内容

(前期)

「天目」「楽茶碗」「井戸茶碗」など日本に伝わる名碗とされる作品を中心に、その背景を学んでいく。実際の作品見学も交える。

(後期)

以下のテーマを設定し、各2～3回ほどで学んでいく。

1: 「陶芸（工芸）」とは何か。

2: 縄文時代の土器から現代まで、約1万3千年の歴史。

3: 幕末から現代までの工芸概念の変遷。

4: 近現代陶芸の歴史を築き上げた主要な陶芸家とその作品

5: 現役作家の造形思考とその作品

その他、東京国立近代美術館工芸館にて展覧会鑑賞および熟覧（作品に触って鑑賞する）。

■受講に当たっての留意事項

専門用語など、わかりにくいことはできるだけ積極的に質問すること。

■成績評価方法

(前期)

出席とレポート

(後期)

出席とレポート

教科書／参考書

■教科書／参考書

(前期)

授業中に適宜指示

(後期)

『近代工芸案内』（東京国立近代美術館）

■備考（オフィスアワー）

相談については都度相談のこと。

(前期担当) 片山まび 教員

(後期担当) 唐澤昌宏 教員

授業科目名	染織工芸史 History and techniques of Asian textiles			
教員名	原田 ロクゴー、沢尾 絵			
開講時期	通年	金曜 3	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

前期:日本染織史 “日本の染と織の歴史通観と技術の理解” が本講義の到達目標である。技術の理解に必要な西洋の染色技法等を含む。

後期:日本服飾文化史とアジアの民族衣装 染織品が服飾・服装を形作る要素であるという視点から日本の服飾文化史を学ぶ。後半はアジアにも視野を広げることで、アジアにおける日本の服飾・染織文化の独自性・共通性をより深く理解することが目標である。授業では多くの資料(写真・映像・実物)を使用する。

■授業計画及び内容

(前期)

- 第1回 “日本の染織史” 概観
- 第2回 原始の繊維
- 第3回 シルクロードの染織
- 第4回 正倉院の染織……織物
- 第5回 正倉院の染織……染物
- 第6回 繊維: 絹
- 第7回 平安・鎌倉時代の染織
- 第8回 有職の織物・模様
- 第9回 舶載の染織
- 第10回 “衣”の形式と小袖の成り立ち/辻が花
- 第11回 小袖を読み解く
- 第12回 西洋の更紗……模様染色技法と顔料・染料
- 第13回 友禅/江戸時代以降の染色技法
- 第14回 近現代の染織(自動紡糸機/自動織機等)
- 第15回 試験

(後期)

- 第1・2回 日本古代の服飾(縄文・弥生・古墳時代)
- 第3・4回 日本上代の服飾(飛鳥・奈良・平安時代)
- 第5・6回 日本中世の服飾(鎌倉・室町時代)
- 第7~9回 日本近世の服飾(桃山・江戸時代)
- 第10回 日本近代の服飾(明治以降)
- 第11回 アジアの民族衣装 導入編
- 第12回 アジアの民族衣装(イスラム圏)
- 第13回 アジアの民族衣装(ヒンズー圏)
- 第14回 アジアの民族衣装(仏教圏ほか)
- 第15回 試験

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

平常点・レポートと試験

■教科書/参考書

最初の授業で各テーマ別の参考図書一覧を配布予定
 前期 教科書は使用しない/適宜ハンドアウトを配布
 参考図書は講義内で適宜紹介
 後期 教科書なし/適宜プリント配布・図書紹介

■備考(オフィスアワー)

授業科目名	建築概論 I Introduction to Architecture I			
教員名	元倉 眞琴			
開講時期	前期	金曜 2	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

この授業は「建築」に関する専門的な技術や知識を学ぶことを目的とするのではない。デザインされた建築や無名の建築などが「どのようにつくられてきたか」その背景を幅広い視野で見えていきます。そして「建築とは何だろう」という問いについて考え、最終的には「建築」に対する各人の見方=物差しを見つけることを目標にしています。

■授業計画及び内容

〈前期〉建築入門編 建築とは何だろう

- 序 建築の世界とそのおもしろさ
- 1 衣服としての建築
- 2 殻(シェルター)としての建築
- 3 巢(樹と地)としての建築
- 4 移動する建築(ゲルについて)
- 5 機械としての建築1
- 6 機械としての建築2
- 7 箱としての建築1
- 8 箱としての建築2
- 9 ミクロコスモスとしての建築
- 10 ランドスケープとしての建築
- 11 集合としての建築
- 12 色彩としての建築
- 13 建築とは何だろう

■受講に当たっての留意事項

ビデオやスライドを多く使う。幾つかのレポートや小課題が課せられる。

■成績評価方法

レポートや小課題の評価 × 出席率

■教科書/参考書

- ・松山巖「建築はほほえむ」西田書店・土居義岳監修「建築キーワード」住まい学大系099、住いの図書館出版局
- ・五十嵐太郎編「建築の書物/都市の書物」IMX出版
- ・バーナード・ルドフスキー「建築家なしの建築・SD選書」鹿島出版会

■備考(オフィスアワー)

金曜日 建築科・元倉研究室

授業科目名	建築概論Ⅱ Introduction to Architecture II			
教員名	トーマス アンソニー ヘネガン			
開講時期	後期	金曜 2	単位	2
履修対象	学部生			
特記事項				

■授業テーマ

建築の歴史はフォームメイキングの歴史ではなく、アイデアの歴史である。この講義では、影響力の大きな、かつ全く全くタイプの異なる建築家を日本及び海外から取り上げ、その主要建築物に具現化されたアイデアを検証するものである。

■授業計画及び内容

- 1 Sigurd Lewerentz
- 2 Sverre Fehn
- 3 Archigram / Cedric Price / Richard Rogers
- 4 Norman Foster
- 5 Glenn Murcutt
- 6 Tadao Ando / Jorn Utzon
- 7 Ivan Leonidov / Bernard Tschumi
- 8 James Stirling
- 9 Arata Isozaki
- 10 Britt Andersen / Richard Leplastrier
- 11 student presentation 1 + discussion
- 12 student presentation 2 + discussion
- 13 Summary

■受講に当たっての留意事項

講義は英語で行われる。

■成績評価方法

出席率とプレゼンテーションによる。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

金曜日 17:00 建築科 ヘネガン研究室

授業科目名	金属材料学 Metallic materials			
教員名	桐野 文良、永田 和宏			
開講時期	通年	水曜 4	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

制作で金属を扱う学生や金属を使おうとしている学生を主な対象とする。金属の結晶構造、結晶中の欠陥、原始の拡散、変形と転位、金属の破壊現象、焼なましと再結晶、金属の変態と状態図、析出と時効、金属の反応、環境と金属、生体内の金属の役割について基礎的事柄を述べ、これらの現象と関連する美術工芸材料用の実用金属材料について制作の視点から解説する。

■授業計画及び内容

- (1) テキスト：「初級金属学」（内田老鶴圃）を使用
テキストの上記テーマに沿って進める。
- (2) 実用金属材料
参考資料配布
- (3) 金属材料実験
金属の物理・化学特性を知るための簡単な実験

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

講義中の小テストと出席率で評価する。

■教科書／参考書

北田正弘著 初級金属学（内田老鶴圃）（講義の初日に指示する）

■備考（オフィスアワー）

fkirino@fa.geidai.ac.jp 水曜日 10:00～12:00（保存科学研究室 桐野）

授業科目名	化学塗装学 Chemistry coating studies			
教員名	鈴木 伸吾			
開講時期	通年	木曜 3	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

〈天然・合成樹脂塗料の基礎知識の取得〉
天然・合成樹脂塗料についての基礎知識（概要、分類、塗料用具、機器設備、各種塗装）を取得する。天然・合成樹脂塗料の選択、塗装計画、塗装の環境設備、塗装管理の必要条件に触れて説明する。塗料・塗装の歴史と併せて環境保全の重要性、安全衛生も取り上げ、美術、デザインの展開を探る。

■授業計画及び内容

- I 塗料・塗装概論（序論）
 - II 塗料概論及び各論
 - 塗料の歴史、役割と効用
 - 塗料の種類及び用途
 - 塗料の構成
 - 塗料の乾燥とその機構
 - III 塗装概論及び各論
 - 塗装目的と意義
 - 塗装の方法
 - 塗装、乾燥の設備
 - 最近に於ける塗装の動向
 - IV 自然塗料と環境
 - V 塗装表現 絵画
 - 塗装表現 彫刻
 - 塗装表現 工芸
 - 塗装表現 建築
 - 塗装表現 FRP（乾漆を含む）
- ・視覚教材（スライド、ビデオ等）

■受講に当たっての留意事項

漆芸専攻学生は必修

■成績評価方法

出席平常点とレポート評価

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

毎週・木3 化学塗装学（中央棟第1演習室）

授業科目名	化学塗装実験（取手） Chemical coating experiment			
教員名	鈴木 伸吾			
開講時期	集中		単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

天然・合成樹脂塗料の特性を活用し、制作に関連した実験と実習を行う。

■授業計画及び内容

9月中旬約7日間を予定
詳しい授業内容、日程等は履修者決定後ガイダンスにて説明する。
(ガイダンス出席は必須)

■受講に当たっての留意事項

材料費が必要である。
※受講者数は10名程度、超えた場合は抽選とし後日ガイダンス日時と合わせて掲示する。
漆芸専攻学生は必修。

■成績評価方法

出席平常点と実験作品の提出

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

毎週・木3 化学塗装学（中央棟第1演習室）

授業科目名	陶磁原料学 Glaze and Ceramic Raw Materials			
教員名	滝 次陽			
開講時期	通年	木曜 4	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

陶磁器の釉や素地について基礎的な知識を紹介する。また、釉薬の開発と利用を目的とした試験（実験）を行い、陶磁器原料の一般的特性を学習する。

■授業計画及び内容

- 陶磁器の種類と分類
- テストピース用石膏型の作製
- 陶磁器の主な原料について
- 素地について
 - 素地の原料
 - 素地の特性（日本、中国、ヨーロッパの磁器素地の比較）
- 釉について
 - 灰釉と石灰釉
 - （灰釉の調製試験）
- 釉の分類
 - 釉性状について
- 釉の操作（ゼーゲル式に基づく釉の調製）
- 色釉及び顔料
- 呉須について
 - （染付の試験）
 - 簡単な呉須の調製試験
 - 調製呉須による染付の発色試験
- 低火度釉について
- 窯の変遷
 - 試験（実験）：テストピースの作製。伝統釉（灰釉）の調合。ゼーゲル式による基礎釉および色釉の調合。呉須の合成。調製呉須による下絵付試験。

■受講に当たっての留意事項

- 座学と平行して実験を行う。実験は時間的に宿題になることが多い。
- 実験実費として年間¥3,000.-程度かかる。

■成績評価方法

規定の出席日数、実験結果とレポートによる総合評価。

前期：1. 灰釉調製試験。

2. レポート。

後期：1. ゼーゲル式に基づく釉調製試験。

2. 呉須の調製と発色試験。

■教科書／参考書

- 講義に必要な資料を毎回配布する。
- 次のものを各自で準備してもらすが、必要な時に案内する。
- 1. 石膏（自費：テストピース型作製用）。
- 2. 粘土 2 kg（自費：テストピース用：陶器素地と磁器素地）。
- 3. 磁製乳鉢（自費：内径 125mm）。
- 4. 電卓（自費：卓上計算機）。
- 5. 参考書（自費：「釉調合の基本：改訂増補版」加藤悦三著，発行：陶工房鳴海）

■備考（オフィスアワー）

木曜日講義前後

授業科目名	染色化学 Chemistry of dyeing and printing			
教員名	原田 ロクゴー			
開講時期	通年	月曜 3	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

染色のメカニズムを理解することが染色化学の目的である。その上で、防染技法を含めた染色工程を把握し、制作に必要な技法・素材・色材・染色環境をいかに選択していくかを見極める力を養ってほしいと考えている。

■授業計画及び内容

- 前期（適宜実験実習を行う）
 - * 染色平衡と染色速度 / 染色
 - * 繊維の鑑別
 - * タンパク質繊維とセルロース繊維
 - * 酸性染料・直接染料・反応染料 実験と考察
 - * 合成繊維総論 …… 重合反応による高分子の生成
 - * 染色助剤
- 定期試験
- 後期（実験実習からの理解を中心とする）
 - * 天然染料 更紗の染色方法から見る染料
 - * 天然染料 媒染のメカニズム
 - * 天然染料 紅花色素抽出と染色のメカニズム
 - * 天然染料 藍染色のメカニズム
 - * 天然染料の色素
 - * 酸と塩基
 - * 糊材
 - * 染料の廃棄
- 定期試験

■受講に当たっての留意事項

ラテックスなどのディスプレイ手袋 1 双とタオル 1 枚を実験時に各自用意する。

■成績評価方法

実験実習への取り組み等平常点と試験

■教科書／参考書

参考書

『染色機能加工要論』 日本学術振興会 繊維・高分子機能加工工業 120 委員会（編）

『染色ノート 第 24 版（第何版でも可）』 色染社

大学生の化学 大野惇吉著 三共出版

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	舞台美術 Theatrical Art			
教員名	島 次郎、服部 基			
開講時期	前期	金曜 2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項	前期+集中で4単位			

■授業テーマ

広義の意味で「舞台美術」とは舞台上の視覚的表現の全てを指しています。舞台装置、衣裳、照明、小道具、アクセサリ等、実に多岐に渡っています。舞台装置と舞台照明の役割も最近特に重要になって来ました。舞台装置と照明は切っても切れない関係です。舞台には実に多くの人々が有機的に絡み合っています。初日までを時間軸をキーとして創造スタッフの職能を理解します。又、実習では実際に舞台装置（模型等）を作り、照明を照らし、その関係を多角的に考察します。

■授業計画及び内容

講義

- 1 劇場とは
- 2 すぐにでも使える舞台用語
- 3 舞台美術が出来るまで
- 4 様々な舞台美術（凡例）
- 5 舞台を構成する人々（初日まで）
- 6 舞台美術
- 7 舞台照明
- 8 照明デザイン

実習

- 1 絵画作成
- 2 大きな画面へ
- 3 立体化
- 4 照明デザインを考え、光を当てる
- 5 発表と批評

見学

- 1 劇場見学

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

出席、創作物の提出。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	写真映像論 Photograph image theory			
教員名	伊藤 俊治、北澤 ひろみ、鈴木 理策、 土屋 誠一、小原 真史			
開講時期	前期	火曜 4	単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

170年にも渡る歴史的遺産を再構築し続ける写真表現は、現代美術や映像映画といった他ジャンルと関係しつつ、テクノロジーの変容と共振しながら、大きな広がりを見せています。この写真映像論では、そうした21世紀の写真状況を、記録、複製、歴史、境界、記憶、無意識、知覚といった様々な視点から読みときながら、“写真の現在性”とは何かを考えてゆきます。

■授業計画及び内容

伊藤俊治：

- 第1回 廃園から（東松照明、中平卓馬、森山大道…）
- 第2回 記憶のジオラマ（ホックニー、デマンド、カレ…）
- 第3回 死にゆくものの光（キャバ、メイブルソープ、S21…）
- 第4回 地誌と類型（ザンダー、バッチャー、グルスキー…）
- 北澤ひろみ：恵比寿映像祭キュレーター
- 第5回 現代美術の現場から ①技法の展開 — 写真・映像におけるコラージュ
- 第6回 現代美術の現場から ②写真・映像がとらえた3.11
- 第7回 現代美術の現場から ③国際展にみる写真・映像表現の現在

鈴木理策：

- 第8回 写真のリテラシーとその実践：ゲストを招き、講評会形式で進める。見る側の任意性が強いメディアである写真を、表現としていかに成立させてゆくか、実践的に考えてゆく
- 第9回 現代写真家研究：明解な視座を持ち活躍する写真家を招き、映像表現が多層化する現代において「写真」という作業を進めることの可能性を探る
- 土屋誠一：美術批評家／沖縄県立芸術大学芸術学専攻専任講師
- 第10回 現代美術と写真：ポストミニマリズム（ロバート・スミッソンなど）以降における、現代美術の写真使用について
- 第11回 美術史と写真：美術作品の分析ツールとしての写真使用と美術史の言説形成について
- 第12回 写真と場所性：写真と「場所」の諸問題と地理的ポリティクスについて

小原真史：映像作家／批評家／IZU PHOTO MUSEUM 研究員

- 第13回 自然と写真について：「自然界の報道写真家」といわれる宮崎学の写真から自然と人間の関係について考えます。
- 第14回 近代日本と写真史について：日本の近代史は写真史と重なっていますが、日本の近代化の過程で撮影されてきた注目すべき写真を戦中を中心に見ていきます。
- 第15回 ヴァナキュラー写真について：IZU PHOTO MUSEUM で開催された「時の宙づり」展をはじめ、今秋に開催予定の「増山たづ子」展など、従来の写真史から注目されてこなかった写真について紹介します。

■受講に当たっての留意事項

授業内容等変更の可能性あり。詳細授業初回時に指示。

■成績評価方法

出席点、平常点、レポート。

■教科書／参考書

特になし。必要な際は、都度指示をする。

■備考（オフィスアワー）

E-mail : pc@ml.geidai.ac.jp

URL: <http://www.geidai.ac.jp/pc/>

授業科目名	現代写真論 Modern photography theory			
教員名	飯沢 耕太郎、山本 和弘			
開講時期	後期	木曜 4	単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

僕は現役の写真評論家なので、日本の写真表現の「現場」にかかわるトピックスを、なるべく新鮮にパッケージしてお伝えしたい。もし、写真を使った作品（ポートフォリオ）を作っている方がおられたら、講評の時間も設けたいと思う。（飯沢耕太郎）
写真は「造形思考の核」として、現代においてあらゆる日常・表現行為の基礎をなすものである。さらに写真は芸術と社会に対して常に批評的なメディアであり続けている。本講義では、いわゆる写真家というよりも、写真を造形思考の核とする“アーティスト・フォトグラファー”たちの具体的作品の分析を通じて、写真というメディアの可能性と限界を考察する。（山本和弘）

■授業計画及び内容

飯沢耕太郎 写真評論家 / きのこ文学研究家

第1回 ポートフォリオを作る

第2回 写真集を読む

第3回 写真展を歩く

第4回 写真をコレクションする

第5回 アジアの写真家たち

第6回 日本の現代写真

第7回 ポートフォリオ講評

山本和弘 美術評論家 / 栃木県立美術館シニア・キュレーター

第8回 写真から絵画への退行：ゲルハルト・リヒター Gerhard Richter(1932-)

第9回 映像から絵画への退行：ジグマール・ポルケ Sigmar Polke(1941-2010)

第10回 ハイパー・パノラマ：アンドレアス・グルスキー Andreas Gursky(1955-)

第11回 カメラレスの世界：トーマス・ルフ Thomas Ruff(1958-)

第12回 印画紙の終焉：ヴォルフガング・ティルマンズ Wolfgang Tillmans(1968-)

第13回 写真装置から光学装置へ：オラファー・エリアソン Olafur Eliasson(1967-)

第14回 アーティスト・リサーチャー（研究者型アーティスト）たちの写真

第15回 世界像の時代：写真の「空け開け Lichtung」

■受講に当たっての留意事項

授業内容等変更の可能性あり。詳細授業初回時に指示。

■成績評価方法

出席点、平常点、レポート。

■教科書／参考書

『写真を愉しむ』飯沢耕太郎（岩波新書、2007）

『写真美術館へようこそ』飯沢耕太郎（講談社現代新書、1996）

『私写真論』飯沢耕太郎（筑摩書房、2000）

『ジャパニーズ・フォトグラファーズー14人の写真家たちの「いま」』飯沢耕太郎（白水社、2005）

『複製技術時代の芸術作品』ヴァルター・ベンヤミン（晶文社、1999）

『明るい部屋』ロラン・バルト（みすず書房、新装版、1997）

『写真論』スーザン・ソントグ（晶文社、1979）

■備考（オフィスアワー）

E-mail : pc@ml.geidai.ac.jp

URL : http://www.geidai.ac.jp/pc/

授業科目名	写真史 History of Photography			
教員名	倉石 信乃、橋本 一径			
開講時期	前期	火曜 5	単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

前半（第1回～第7回）の授業では、ヨーロッパで1839年に「発明」された写真が、様々な方面にもたらしたインパクトを、具体的な事例を通して検証する。今日の私たちは、自分や他人が誰であるのかを証明するのに写真を求め、ニュースの真偽を写真で判断し、旅先などで見たものを撮影することで、写真に記憶を肩代わりさせる。写真の「発明」は、単なる一つの技術の発明という枠組みを超えて、私たちの生活に深く根を張っており、写真のなかった世界は、もはや想像することも困難なほどだ。写真に対する私たちの信頼はかくも大きく、それだけに写真に裏切られたときの絶望もまた深刻である。現代の私たちは、「写真的信仰」の敬虔な信徒であると言っても過言ではないだろう。こうした「信仰」を客観的に見つめなおし、その過去・現在そして未来——写真の滅亡？——を想像して見るのが、この授業の最終的な目標となる。（橋本一径）
後半（第8回～15回）の授業では、「日本写真史」の再考を試みる。近代日本において、一般の人々が「内国」と「外国」の地理的な境界や分離をはっきりと知ようになるのは、おおむね日清戦争（1894-95）の時代と見られる。その頃より、中央から離れた「地方」や他の東アジア諸国に対する「国民」的な差別感情もいっそう根付いていった。こうした「日本」の地政学的な観念の形成に、写真というメディアが深く関与した事績を踏まえつつ、当の地政学に対する批判の可能性を、いくつかの作例・資料例から探りたい。（倉石信乃）

■授業計画及び内容

橋本一径 早稲田大学文学学術院准教授

第1回 イントロダクション：写真—芸術と記録の間で

第2回 写真と指紋—顔、アイデンティティ、複製

第3回 写真と著作権—写真の「私」は誰の「もの」か？

第4回 定点観測写真—すでにないものの痕跡

第5回 心霊写真—アウラ、プンクトゥム、ノスタルジー

第6回 写真と科学—稲妻はジグザグか

第7回 写真と修整—写真的信仰を超えて

倉石信乃 明治大学大学院理工学研究科教授

第8回 植民—北海道、中国、朝鮮

第9回 反復—沖繩戦、以前と以後

第10回 災厄—関東大震災、東日本大震災

第11回 現実—土門拳、木村伊兵衛

第12回 占領—東松照明、伊志嶺隆

第13回 観光—中平卓馬1

第14回 国境—中平卓馬2

第15回 まとめ

■受講に当たっての留意事項

遅刻は2回で欠席1回に数える。授業内容等変更の可能性あり。詳細授業初回時に指示。

■成績評価方法

平常点（出席点を含む）20%、中間レポート40%、期末試験40%を内訳として、合計して60%以上の評点を得た者を合格とする。

■教科書／参考書

教科書は使用しない。参考書は授業内に指示する。

■備考（オフィスアワー）

E-mail : pc@ml.geidai.ac.jp

URL : http://www.geidai.ac.jp/pc/

授業科目名	イメージ環境論 Media Environment			
教員名	長寫 寛幸、松井 茂、村上 友重			
開講時期	後期	火曜 5	単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項	(映像研究科生も履修可能)			

■授業テーマ

スマートフォンに代表される視覚、聴覚を複合的、多層的に刺激するメディアの登場によって、私達をとりまく視聴覚環境は急速に変化している。それらのメディアが発生させる視聴覚イメージ群を「視覚」、ないし「聴覚」といった形で個別に取り出して検証を行うことは、もはや意味をなさない。それらの視聴覚イメージ群を「視覚+聴覚」という図式で考えるのではなく、総体としての「イメージ環境」として捉え直すことが表現者に必要とされる時代が到来している。その為に、概念として「イメージ環境」を把握するだけではなく、身の回りにあるメディアを用いた「イメージ環境の再構成」を実践していく。

■授業計画及び内容

現在はディスプレイの時代である。時々刻々算出されるオーディオ・ビジュアルな記号体系は、私たち人間を吸収し、新たなイメージ環境を形成している。こうした前提から絵画、写真、映画、テレビジョン、コンピュータというようなメディア技術を問い、芸術表現の設計(デザイン)を考える。実習としては、視覚面からは、身の回りに溢れる主に「写真」のイメージを扱いながら、如何にそれらを取得し、自分の思い描く形態(形状)へと近づけていくか、その方法について実践する。その中で、デジタル環境で色を扱う上での基本でもあるカラーマネジメントについても触れていく予定。音響面からは、オーディオ・レコーダーを「音のカメラ」として再認識し、フィールド・レコーディングを行う。その過程で記録された音群から私達を包み込む音響的な記号体系=音響的リアリティーを現前化し、「サウンドスケープとはイメージスケープである」という仮説の検証を行う。

■受講に当たっての留意事項

特になし

■成績評価方法

出席、レポートないし作品提出(課題による)

■教科書/参考書

必要であれば、随時指定

■備考(オフィスアワー)

E-mail: pc@ml.geidai.ac.jp
URL: http://www.geidai.ac.jp/pc/

授業科目名	メディア音楽演習(取手) Music Media Workshop			
教員名	柴田 悠基			
開講時期	前期	月曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

音、映像を使った作品をコンセプトをたてることから始め、順次制作していく。
音、映像を扱う基礎的な技術を実習を通して修得する。

■授業計画及び内容

コンピュータをインターメディアとした音や映像を構成素材として扱う作品はそれらの仕組みを理解するところから制作が始まります。この講義ではコンピュータ内で処理・発生する音や映像の仕組みを演習を通じて理解を深めます。後半は各自のコンセプトに沿って、それらを編集、プログラミング、構成し、作品を制作する。

※本演習では、プログラミング言語「Max/MSP Jitter」を使用し、音や映像に関連するさまざまな技法を学ぶ。プログラミングに限らず音や映像を使用したインスタレーション作品の制作も可能であるが、プログラミングに関する演習内容が多くを占めるため留意すること。

履修上の指示事項を確認すること。

■受講に当たっての留意事項

学部2年以上対象。
実習授業のため参加可能人数に制限がある。
参加可能人数を超えた場合は抽選を行う。
コンピュータの基本的操作に習熟していること。段階的に実習していくので、全日程に参加できる者だけ受講すること。途中参加、欠席は不可。

■成績評価方法

出席、課題提出

■教科書/参考書

■備考(オフィスアワー)

水曜日 13時30分～ メールで連絡してください。
shibata.yuki@fa.geidai.ac.jp

授業科目名	プログラミング演習Ⅰ（取手） Programming I			
教員名	田中 孝太郎			
開講時期	前期	水曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

コンピュータプログラミングに関する基礎的な概念を理解し、コンピュータを使った作品制作や、インタラクティブなコンテンツ制作に必要な技術を身につける。

■授業計画及び内容

プログラミングの演習に「Processing (<http://processing.org/>)」を用いる。プログラミングによるグラフィック描画、アニメーションの方法、マウスやキーボードからの入力を使ったインタラクションなどを学習して、課題作品を制作する。

■受講に当たっての留意事項

基本的なコンピュータの操作や設定方法に慣れていること。コンピュータプログラミングの言葉の意味を知っていること。なお、機材の都合により、人数調整を行う場合がある。授業外でも制作が進められるよう、自宅のコンピュータやマシンルームが活用できることが望ましい。

■成績評価方法

出席、課題提出、制作物により、総合的に評価する。

■教科書／参考書

テキストは適宜配布する。以下の参考文献に沿って進行する。
『Built with Processing デザイン／アートのためのプログラミング入門』（BNN 新社）

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	プログラミング演習Ⅱ（取手） Programming II			
教員名	田中 孝太郎			
開講時期	後期	水曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

前期「プログラミング演習Ⅰ」での基礎的なプログラミングスキルをベースに、より高度なプログラミングを体験し、各個人のテーマに応じたプログラム作品を制作する。

■授業計画及び内容

オブジェクト指向、ネットワークプログラミング、スマートフォンアプリなど、より高度なプログラミング技術の演習を、前期と同様にプログラミング環境「Processing」を用いて行う。授業後半では、各個人の企画でプログラム作品の個人制作を行う。スマートフォン向けアプリケーション開発環境を用いてコンピュータ上のシミュレータでの動作確認を基本とするため、個人でスマートフォンを持っていなくても受講は可能です。

■受講に当たっての留意事項

原則として前期「プログラミング演習Ⅰ」を受講していること。なお、機材の都合により、人数調整を行う場合がある。授業外でも制作が進められるよう、自宅のコンピュータやマシンルームが活用できることが望ましい。

■成績評価方法

出席、課題提出、制作物により、総合的に評価する。

■教科書／参考書

テキストは適宜配布、紹介する。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	メディアデザイン演習Ⅰ（取手） Design Media Workshop I			
教員名	森垣 賢			
開講時期	前期	木曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

複合的なメディア環境での研究制作活動の基盤づくりとして、グラフィックデザインの基礎について講義と演習を通して学ぶ。

■授業計画及び内容

書体、文字組版、レイアウトなどの講義とともに、DTP アプリケーションを使用した演習を行う。

- DTP (desktop publishing) 基礎知識
- DTP アプリケーションの使用法
- 欧文書体 (欧文書体の歴史と背景、セリフ体、サンセリフ体)
- 和文書体 (和文書体の歴史と背景、活字、写植、デジタルフォント)
- 組版・レイアウト基礎
- 画像処理 (DTP における画像の取り扱い)
- ダイアグラム

■受講に当たっての留意事項

基本的なコンピュータの操作法を修得していることを前提とする。メディアデザイン演習Ⅰ・Ⅱは、それぞれ独立科目として開設するが、合わせて履修することが望ましい。なお、機材の都合により定員は 30 名前後。超過した場合は抽選となるので、受講希望者は必ず初回ガイダンスに出席する事。

■成績評価方法

出席、課題提出、制作物による総合評価。

■教科書／参考書

授業の中で適宜紹介する。

■備考（オフィスアワー）

E-mail : ken_morigaki@mac.com

授業科目名	メディアデザイン演習Ⅱ（取手） Design Media Workshop II			
教員名	森垣 賢			
開講時期	後期	木曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

複合的なメディア環境での研究制作活動の基盤づくりとして、グラフィックデザインの基礎について講義と演習を通して学ぶ。

■授業計画及び内容

メディアデザイン演習Ⅰを基礎として、印刷表現などを中心に演習を行う。

- 印刷について (印刷版式、印刷方式、インキなど)
- 用紙について (サイズ、単位、印刷用紙の種類など)
- 入稿について (見積もり→制作→入稿→色校正→納品の一連の流れを体験)
- 印刷博物館・印刷所見学
- 組版・レイアウト
- 欧文書体制作

■受講に当たっての留意事項

メディアデザイン演習Ⅰの単位取得者、または相応程度のスキルを修得していることを前提とする。なお、機材の都合により定員は 30 名前後。

■成績評価方法

出席、課題提出、制作物による総合評価。

■教科書／参考書

授業の中で適宜紹介する。

■備考（オフィスアワー）

E-mail : ken_morigaki@mac.com

授業科目名	写真表現演習 I (取手) Photography Workshop I			
教員名	佐藤 時啓、鈴木 理策、佐野 陽一			
開講時期	前期	金曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

見ること、見えること、フレーミングすること、写真は外界を鏡のように映し出す。あなたは何を見ようとするのか。撮影行為から暗室作業まで銀塩写真の一連の制作過程を通して、写真表現の可能性について実践的に考察する。それは、自身の外側の世界とかわることから、自らを見つめる作業を繰り返していくことでもある。

■授業計画及び内容

デジタル時代になっても決して変わる事のない“光が孔を通じて結像する仕組み”を体験することから始まり、写真が成立する過程を学ぶのに相応しいアナログ銀塩写真を中心に授業を行う。撮影や暗室作業そして作品の講評を繰り返しながら、最終的に展示形式の講評会を行い普遍的な写真のありようを学ぶ。具体的には35mmカメラを用いたモノクロフィルムと印画紙による表現となる。

- ・カメラオブスキュラの体験により写る事の仕組みを学ぶ
- ・モノクロフィルム現像と印画紙へのプリントから、ネガとポジの関係を学ぶ
- ・暗室作業から、フィルム、印画紙と光の関係を学ぶ(フォトグラム実習を含む)
- ・写真展等の見学をする
- ・展示形式の講評会とポートフォリオの制作を最終的に行う

■受講に当たっての留意事項

自らの積極的な意志をもって受講することが求められる。材料費¥15000の他、各自が使用するフィルムカメラを用意すること。また、制作にあたって必要となるフィルム、印画紙等の消耗品は初回支給分を除いて個人負担となる(但し、処理薬品は材料費で賄う)。尚、暗室機材の台数の都合により前期、後期ともに各14名を定員とする。超過した場合は抽選(前期、後期ともに4月初回授業時に行なう)となるので必ず出席すること。

■成績評価方法

出席状況と作品(講評会、ポートフォリオ)による総合評価。

■教科書／参考書

■備考(オフィスアワー)

授業科目名	写真表現演習 I (取手) Photography Workshop I			
教員名	佐藤 時啓、鈴木 理策、佐野 陽一			
開講時期	後期	金曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

見ること、見えること、フレーミングすること、写真は外界を鏡のように映し出す。あなたは何を見ようとするのか。撮影行為から暗室作業まで銀塩写真の一連の制作過程を通して、写真表現の可能性について実践的に考察する。それは、自身の外側の世界とかわることから、自らを見つめる作業を繰り返していくことでもある。

■授業計画及び内容

デジタル時代になっても決して変わる事のない“光が孔を通じて結像する仕組み”を体験することから始まり、写真が成立する過程を学ぶのに相応しいアナログ銀塩写真を中心に授業を行う。撮影や暗室作業そして作品の講評を繰り返しながら、最終的に展示形式の講評会を行い普遍的な写真のありようを学ぶ。具体的には35mmカメラを用いたモノクロフィルムと印画紙による表現となる。

- ・カメラオブスキュラの体験により写る事の仕組みを学ぶ
- ・モノクロフィルム現像と印画紙へのプリントから、ネガとポジの関係を学ぶ
- ・暗室作業から、フィルム、印画紙と光の関係を学ぶ(フォトグラム実習を含む)
- ・写真展等の見学をする
- ・展示形式の講評会とポートフォリオの制作を最終的に行う

■受講に当たっての留意事項

自らの積極的な意志をもって受講することが求められる。材料費¥15000の他、各自が使用するフィルムカメラを用意すること。また、制作にあたって必要となるフィルム、印画紙等の消耗品は初回支給分を除いて個人負担となる(但し、処理薬品は材料費で賄う)。尚、暗室機材の台数の都合により前期、後期ともに各17名を定員とする。超過した場合は抽選(前期、後期ともに4月初回授業時に行なう)となるので必ず出席すること。

■成績評価方法

出席状況と作品(講評会、ポートフォリオ)による総合評価。

■教科書／参考書

■備考(オフィスアワー)

授業科目名	写真表現演習Ⅱ Photography Workshop II			
教員名	佐藤 時啓、小山 穂太郎、村上 友重			
開講時期	前期	月曜 3・4	単位	4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

写真の基礎的な銀塩写真過程経験者を対象に、カメラの構造やその扱い方を詳しく学び、写真における実践的な制作とその表現の可能性を探る。大判カメラのあおりの使用を中心に、4×5 inch サイズのフィルムを使用して、屋外撮影やスタジオワークなどの実習を行い、表現者としての強度を身に付ける。各自がテーマを持ち、それに向けてどのように取り組むべきかを主体的に考える積極性が求められる。

■授業計画及び内容

実習と平行して各自が課題制作に取り組み、中期講習会（プレゼンテーション形式）と学期末講習会（展示形式）を行う。

【日程】

- ・ガイダンス（4月）
- ・カメラのメカニズム -- 大判カメラのアオリ（1）
- ・カメラのメカニズム -- 大判カメラのアオリ（2）
- ・シートフィルム現像 -- 皿現象と自動現像機（JOB0）
- ・撮影、シートフィルム現像
- ・白黒プリント（バライタ紙）
- ・撮影、フィルム現像、プリント
- ・中期講習会（プレゼンテーション形式）
- ・スタジオワーク -- ライティング、接写撮影など
- ・撮影（スタジオ、屋外）フィルム現像プリント
- ・白黒大伸ばしプリント -- 壁面投影による
- ・中期講習会（プレゼンテーション形式）
- ・ゲスト講習会
- ・大型プリンター講習 / マウントについて
- ・学期末講習会（展示形式）

■受講に当たっての留意事項

教材費として初回に 7500 円が必要です。4 月にガイダンスを設け、そこで受講者を決定する。よって、ガイダンス出席は必須。また、履修条件として「写真表現演習Ⅰ」または、各科の写真授業の単位取得者、あるいは写真センター講習会の「白黒フィルム現像」と「白黒プリント」を受講した者に限る。前期、後期ともに 10 名を限度とする。スケジュールは変更の可能性あり。その都度、指示する。

■成績評価方法

出席と作品による総合評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

E-mail : pc@ml.geidai.ac.jp

URL : <http://www.geidai.ac.jp/pc/>

授業科目名	写真表現演習Ⅱ Photography Workshop II			
教員名	佐藤 時啓、小山 穂太郎、村上 友重			
開講時期	前期	月曜 3・4	単位	4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

写真の基礎的な銀塩写真過程経験者を対象に、カメラの構造やその扱い方を詳しく学び、写真における実践的な制作とその表現の可能性を探る。大判カメラのあおりの使用を中心に、4×5 inch サイズのフィルムを使用して、屋外撮影やスタジオワークなどの実習を行い、表現者としての強度を身に付ける。各自がテーマを持ち、それに向けてどのように取り組むべきかを主体的に考える積極性が求められる。

■授業計画及び内容

実習と平行して各自が課題制作に取り組み、中期講習会（プレゼンテーション形式）と学期末講習会（展示形式）を行う。

【日程】

- ・ガイダンス（4月）
- ・カメラのメカニズム -- 大判カメラのアオリ（1）
- ・カメラのメカニズム -- 大判カメラのアオリ（2）
- ・シートフィルム現像 -- 皿現象と自動現像機（JOB0）
- ・撮影、シートフィルム現像
- ・白黒プリント（バライタ紙）
- ・撮影、フィルム現像、プリント
- ・中期講習会（プレゼンテーション形式）
- ・スタジオワーク -- ライティング、接写撮影など
- ・撮影（スタジオ、屋外）フィルム現像プリント
- ・白黒大伸ばしプリント -- 壁面投影による
- ・中期講習会（プレゼンテーション形式）
- ・ゲスト講習会
- ・大型プリンター講習 / マウントについて
- ・学期末講習会（展示形式）

■受講に当たっての留意事項

教材費として初回に 7500 円が必要です。4 月にガイダンスを設け、そこで受講者を決定する。よって、ガイダンス出席は必須。また、履修条件として「写真表現演習Ⅰ」または、各科の写真授業の単位取得者、あるいは写真センター講習会の「白黒フィルム現像」と「白黒プリント」を受講した者に限る。前期、後期ともに 10 名を限度とする。スケジュールは変更の可能性あり。その都度、指示する。

■成績評価方法

出席と作品による総合評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

E-mail : pc@ml.geidai.ac.jp

URL : <http://www.geidai.ac.jp/pc/>

授業科目名	映像演習Ⅰ（取手） Seminar in Image Design I			
教員名	山川 冬樹			
開講時期	前期	火曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

実制作を通して映像の基礎的な技術と理論を修得する。映像において最も基本的な原則である「視点」を主要なテーマに据えて授業を進める。

■授業計画及び内容

- ・ディスカッション・作品プランのプレゼン。コンテの制作。
 - ・撮影技術と機材の基礎。照明と光学の基礎。
 - ・素材リスト、編集シートの作成・ノンリニア編集の実際。
 - ・講評会・上映会（取手校地メディア教育棟にて）。
- 上記制作と平行して、小課題の出題、レクチャーを行う。

■受講に当たっての留意事項

履修希望者多数の場合、抽選となる場合がある。

■成績評価方法

出席と作品評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	映像演習Ⅱ（取手） Seminar in Image Design II			
教員名	山川 冬樹			
開講時期	後期	火曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

現在ほど映像が生活環境の一部を成し、氾濫している時代は未だかつてない。そんな今日の状況において、我々はいかなる映像表現が可能なのだろうか。この授業では、前期で学ぶ映像の基礎を踏まえつつ、音声や言語といった、周辺領域との接点から「映像」というものを捉え直す。

■授業計画及び内容

- ・レクチャー：様々な事例を取り上げながら、視覚と聴覚について考察する。
- ・收音と機材の基礎。
- ・作品制作
- ・発表：講評会、上映会（取手校地メディア教育棟にて）。

■受講に当たっての留意事項

履修希望者多数の場合、抽選となる場合がある。コンピューターを使用した映像編集の基礎を習得していることを条件とする。

■成績評価方法

出席と作品評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	ドローイング演習 (取手) Drawing			
教員名	小沢 剛			
開講時期	前期	火曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

線を描くという事は、何かを選ぶ事であり、平面を区切る事であり、時間を刻み付ける事であり、身体の痕跡でもあり、思考の足跡を残す事ことではないだろうか。

有史以来、人が行って来た線を描くということを学んでみよう。

■授業計画及び内容

線をテーマに、先人の描いて来たあらゆるドローイングを参照しつつ、毎時間、異なるテーマで描く。

・線を知る ・触覚を研ぎすます ・身にまとう作品を考える ・植物の構造を捉える ・チームでパノラマを作る ・直感を磨く ・音を描く など

■受講に当たっての留意事項

定員を24名とし、先端学部生を優先として抽選を行う。途中で放棄するような学生は受けられなかった学生に迷惑がかかるので熟慮してから希望をだすこと。

ドローイングに必要な材料は、各自用意すること。詳細は授業内で指示。

■成績評価方法

出席は厳しくおこなう。

課題ごとの作品によって評価する。

■教科書／参考書

線の演習 章国社 著者 小沢剛+塚本由晴 2200円

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	映像芸術論 Introduction to Image Art			
教員名	伊藤 俊治			
開講時期	集中		単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

写真や映画からビデオやCGに至る人間の映像体験の意味を再検証する。過去2世紀あまり大きく変化してきた映像の歴史をたどりながら、「映像を見る」とはどのような営みなのかを自分の身体感覚を通じて問い直してゆく。映像の変容が新しい表現を生み出してゆくばかりではなく、映像の見方に本質的な変化を与え、世界の認識法や世界の感じ方に大きな変質をもたらしてきたことを実感させる。

■授業計画及び内容

こうした視覚メディアの考古学を試みながら映像表現や映像芸術の構造や形式について多面的な角度から考察し、映像という魔術の輪郭を浮かび上がらせる。

まず見ることを徹底的に意識化し、集中的に見続けることからこの講義は始まる。多様な映像の運動に身をまかせながら、それらの映像を見ている自分自身にも注意を向け、自己の意識が映像の流れの中でどのように変化してゆくのか、映像と自己の関係の変容を感じ取って欲しい。

さらに次の段階ではただ見るだけではなく、映像の作り手の思考にも手を伸ばして行って欲しい。映像を漠然と見るのではなく、なぜこんな表現をしたのか、どうしてこのようなカットなのか、この編集の流れや構成をとったのはどのような意図なのか、この色彩や言葉やキャラクターはどのような効果を持つのか、という具合にさまざまな設問を発し、映像の組織に深く入り込んでもらいたい。

そのことは必ず自分の表現や作品づくりと重なってゆくはずである。絵を描いたり、研究しようとする時、古今東西の優れた名作をたくさん見たり、模倣したりするように、映像芸術も名作をなるべく多くじっくり吟味して鑑賞することが重要である。ここでは厳選された映像作品を集中的に見ながら記憶や身体、無意識や感情と密接に結びつけた未来の映像の見取り図を描き出したい。

■受講に当たっての留意事項

集団で集中して見るという共通体験を重視したいので時間は厳守すること。上映中は私語はもちろん厳禁。

■成績評価方法

出席・レポート

■教科書／参考書

伊藤俊治「ジオラマ論」ちくま学芸文庫 1350円

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	音表現論 (取手) Theory of sound expression			
教員名	川崎 義博			
開講時期	通年	木曜 2	単位	4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

音（環境音、音楽等あらゆる音が対象）を主体に、サウンドスケープ概念を軸にして、我々をとりまく、社会、歴史、文化、環境を捉えて行くこと。そして、そこから〈音〉で表親していく方法論を学び、音の表現の多様性を学んでいきます。

具体的には〈音〉を基点に、そこから生まれてくる「表現」、特にサウンドアート、メディアアートなどの作品に触れつつ、音をメインの素材として、どのように表現していくのか？を学びます。

また、映像作品（ビデオインスタレーションや映画など）に置ける「音と映像の関係」を構造的に捉え、映像作品の実例などを見つつ、その可能性を探って行きます。さらに、絵画、写真、身体表現、文学作品、WEB上の作品など、他の表現領域における〈音〉の存在にも踏み込んで行きます。Key= 音が〈在る〉こと、音が〈無い〉こと。

■授業計画及び内容

前期授業計画 Input = 聞く、聴く、聴かぬ事

まず、サウンドスケープという概念を通じて物事をとらえていくことを学びます。実際にはワークショップ等を交えながら、「聴く事」を体験しつつ、音の物理的特性、我々の音に対する生理的特性にも触れ、我々が環境情報を「音」としてどう認知しているのか？聞きながらも何故認知していないのか？などを学んで行きます。

そして、サウンドアートからのアプローチとして、「聴く事=表現」と言う方法論の作品から、作品として成り立っていく過程を検証し、新たな表現の領域へと進んで行きます。

また、文学作品、絵画、写真などの領域で音がどのように表現されたか？なども検証して行きます。

後期授業計画 Output = 聴く事から表現する事へ

様々なアプローチを持つサウンドアートの作品を探る中から、新たな音の表現方法を学びます。また、新しいメディアにも積極的にアプローチし、WEB上の作品などにも触れ、その中の〈音の位置〉を確認して行きます。そして何よりも、映像作品に置ける〈音の役割〉、〈音と映像の関係〉を構造的に捉え、実際の作品（映画、ビデオ作品）を見つつ、その関係性、表現方法の変遷を検証します。

前期後期通じて

- ・音とは？
- ・サウンドスケープ
- ・聞く事、聴く事、聴かぬ事
- ・聴く=表現
- ・サウンドアートとは、その方法論
- ・映像と音の関係
- ・サウンドデザイン
- ・変わりゆくメディアより

以上の事項を関連持たせつつ、進めて行きます。

基本的には講義形態ですが時に理解を深めるため、ワークショップも行いつつ進めていきます。

定まった教科書は使用しませんので、折に触れコピー等を使用します。また「音」「映像」を多用して行きます。

■受講に当たっての留意事項

通年出席できる人。自らの作品の中で音を思考していける人。

■成績評価方法

出席・課題提出

■教科書／参考書

特定の教科書は使いません。参考文献等は開講時等、随時指示します。また必要資料はコピーで配布します。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	環境表象論 (取手) Environment and Representation			
教員名	銅金 裕司			
開講時期	通年	水曜 2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

世界には多様な生命や物質が満ち溢れ、それらが互いに呼応し、私達の想像も及ばない未知なる生命のネットワークを形成しています。たとえばランとミツバチの知られざる世界。それらの生命と環境世界の（ダーウィン、ドゥルーズあるいはベイトソンの）精神やいろいろな生命の「知性」をいかにして感じとり、知って、さらに考察して芸術や科学において実践できるのでしょうか？そして生命と環境の生理・生態から有機的・無機的な表象・表現に向かう私たちの創造とは？このように（自然科学全般から）科学、民俗学～現代思想の成果をもとに総合芸術の理論と実践に繋がる「創造の秘密」（アートとしてのテーマ性）に迫りたいと思います。

■授業計画及び内容

【授業計画及び内容】

・前期授業計画（環境表象論基礎）

第1回 環境表象とは マルチメディアにおける環境表象のガイダンス

第2～3回 環境表象と絵画・映像 視覚芸術に見られる生命観・環境表象の変遷

第5～8回 環境表象と音楽 さまざまな音楽による生命観と環境表象の連鎖

第4～6回 環境表象と文学 外国・日本文学に見られる生命観と環境表象の変遷

第9～11回 環境表象と生命論 古典から現代に至る生命史論と環境表象の変遷

第11～13回 環境表象と自然科学 数学・物理学からみた生命観と生物情報科学の変遷

第14～15回 環境表象演習 全員でいくつかの課題に取り組み実践する

・後期授業計画（環境表象論各論）

第1回 環境表象（1）海洋学とメルヴィルの精神

第2回 環境表象（2）数理的精神と2人のフランシス・ベーコン

第3回 自然と人工 パシヴァールと三木成夫の世界

第4回 地球生態学（1）生態学と生理学（カオスと複雑系の理論から）

第5回 地球生態学（2）公害、人為、民意（長良川河口堰と神戸空港などの問題から）

第6回 環境表象（3）ラン科植物の生物学とオートポイエーシス

第7回 環境表象（4）古典園芸文化の現代性あるいは園芸という人為について

第8回 植物の声を聞く プラントロントメスメリズム

第9回 アフォーダンス ダーウィンと植物の精神生理学

第10回 若沖の生命世界若沖が京都石峯寺五百羅漢像作成で考えたこと

第11回 箱庭論（1）フランシス・イェーツらワールブルグ学派のオカルト哲学

第12回 箱庭論（2）ユング心理学と南アジアの風水について

第13回 箱庭論（3）世界劇場とインターネットあるいは組み合わせ術

第14回 バイオメディアアート バイオメディアアートはいかに可能か

第15回 課題発表

■受講に当たっての留意事項

ときにレポートを課す。アートパス取手（最終講義を展覧会として）などに出席を求める場合があります。

■成績評価方法

課題発表会、展示参加などで評価を定める。

■教科書／参考書

なし

■備考（オフィスアワー）

ydogane@yahoo.co.jp

授業科目名	身体言語論 (取手) Language and body			
教員名	長谷部 浩			
開講時期	通年	月曜 2	単位	4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

身体芸術を深く理解するためには、コードを読み解く技法が必要で

す。ピナ・バウシュや坂東玉三郎の舞踊、蜷川幸雄、野田秀樹の演出の舞台について、映像資料を参照しながらその作品がいかに世界に向かって開かれているかを考えつつ、パフォーマンスの基礎的な理論を学びます。また、講義のみならず、実際にパフォーマンスの制作を平行して行い、個人制作ではなく、集団によって作品を創造する喜びを体験してもらいます。

また、後期は、前期に続いてパフォーマンスの制作を続行するとともに、クリエイティブな文章の成り立ちについて、基礎から指導を行います。作文でもない、論文でもない。読み手を意識した文章を書くための技法を鍛えていきます。

取手に在籍する多くの科、及び大学院からの「参加」を期待しています。

■授業計画及び内容

- 第一回 ピナ・バウシュ 1 ダンスとは何か？
- 第二回 ピナ・バウシュ 2 ダンスと演劇のあいだ
- 第三回 野田秀樹「パンドラの鐘」を分析する 1 天皇と政治責任
- 第四回 野田秀樹「パンドラの鐘」を分析する 2 日本人の精神性
- 第五回 野田秀樹「パンドラの鐘」を分析する 3 アメリカと日本の関係
- 第六回 蜷川幸雄演出『マクベス』1 舞台における権力の描かれ方
- 第七回 蜷川幸雄演出『マクベス』2 時間と空間をまたぎこすための技法
- 第八回 蜷川幸雄演出『マクベス』3 スペクタクルな演出とはなにか。
- 第九回 坂東玉三郎『京鹿子娘道成寺』を分析する 1 女形と性の横断
- 第十回 坂東玉三郎『京鹿子娘道成寺』を分析する 2 伝説と神話
- 第十一回 坂東玉三郎『京鹿子娘道成寺』を分析する 3 イメージの描出とは何か。
- 第十二回 (以降は授業開始時に発表する)

■受講に当たっての留意事項

身体と言語、表現の根底にあるふたつの大切な概念を、理論と実践の両輪で学んでいく意欲的な学生を求めます。

■成績評価方法

作品評価 (50%)、出席 (50%)

■教科書／参考書

教科書 長谷部 浩 『傷ついた性 デヴィッド・ルヴォー演出の技法』(紀伊國屋書店)、『演出術』(ちくま文庫)、『野田秀樹論』(河出書房新社)、『坂東三津五郎 踊りの愉しみ』(岩波書店)。

■備考 (オフィスアワー)

月曜日の午後。事前にコンタクトを取ってください。

授業科目名	空間映像演習 (取手) Exercise Video Space			
教員名	風袋 宏幸			
開講時期	集中		単位	2
履修対象	学部生 (先端芸術表現科のみ)			
特記事項				

■授業テーマ

身体を取り囲む空間を表現の媒体とする。舞台美術、身体表現、舞台照明、演出などの基本的なところを実体験する。

■授業計画及び内容

5人から10人ほどのグループになり、演出、音楽、照明、美術、衣装などを各グループ内で担当を決めて、演劇的作品を制作し発表する。

■受講に当たっての留意事項

集中講義ですので限られた時間で企画、制作、発表と密度の濃い授業となります。実制作、グループでの稽古などが、各グループの判断により授業時間外でも行われる場合があります。

■成績評価方法

出席率、発表作品成績

■教科書／参考書

特にありませんが、これまでの日比野克彦のアートプロジェクト記録集などを事前に目を通しておくなど、参考にすれば、心構えとしてはよいでしょう。

『日比野克彦アートプロジェクト「ホームアンドアウェー」方式』(記録集 / 金沢 21 世紀美術館刊)

【参考文献】

『Katsuhiko Hibino Yesterday Today Tomorrow』(写真集 / リトルモア刊)

『HIBINO EXPO 2005 日比野克彦の一人万博』(記録集 / 水戸美術館刊)

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	複合表現演習Ⅰ（取手） Seminar in Compound Expression I		
教員名	木幡 和枝、八谷 和彦		
開講時期	集中	単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

各自が東京の家を出た時から、この授業がスタートする。独自のルートを辿って秋田県の森吉山麓に集合し、東北を移動する最中に起った体験や、それによって湧きあがる想像力を現地で物質化し、自然と人間の境界に立地する山小屋という場所に、最終的にはパブリックアートを設置する。また山小屋に宿泊し、昼ではなく「夜」のための作品、見えるのではなく、見えない作品を考える。山村を歩き、身体の移動させ、地形と肉体を紙と鉛筆のようにつかってデッサンをし、人と会い、物語り、構想力を強化し、体内から起こってくる何ものかに耳を傾け、誠実に表現できる力を遊びで鍛えてゆく。

■授業計画及び内容

講師：鴻池朋子（アーティスト）
開催期間：9月下旬（5日間の演習を予定。現地集合、現地解散）
（※詳細は後日発表）
開催場所：秋田県森吉山阿仁避難小屋にて合宿
（※変更の可能性あり、詳細は集中講義履修時に確認のこと。）

■受講に当たっての留意事項

人数制限と抽選の可能性、実習費の徴収の可能性がある。
複合表現演習Ⅱ、Ⅲと合わせて履修することを勧める。

■成績評価方法

■教科書／参考書

特になし

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	複合表現演習Ⅱ（取手） Seminar in Compound Expression II		
教員名	木幡 和枝、八谷 和彦		
開講時期	集中	単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

能は、能舞台という空間が、能装束というコスチュームが、面という顔が、謡や囃子などの音楽が、そしてその戯曲が、その中に居る能役者をがんじがらめにするのですが、さてそこからどう自由になっていくのでしょうか？

■授業計画及び内容

講師：清水寛二（観世流シテ方、鏡仙会理事、能楽協会会員、日本能楽会会員、重要無形文化財総合指定、沖縄県立芸術大学非常勤講師）
この講義では、能について包括的に学ぶ。能の基本的事項に続き、古典と新作についての解説などへ広げる。また、謡の実習および本物の装束着けの見学も行う。最終日には学生ひとりひとりが実際に面を着けて摺り足で動き、どのように身体と声が使われるのかを体感する。
この講義はパフォーマンスを志す学生はもちろん、絵画、音楽、写真、彫刻、デザイン、インスタレーション、などあらゆる方向性を持った学生にも広く開かれている。パフォーマンスや身体表現の経験は不要であり、ただ好奇心と意欲を持って参加して頂きたい。

■受講に当たっての留意事項

開講予定日と場所は集中講義履修登録時に確認する事。
適切な木の床が必要なため、期間中の場所変更がある。
実習費を徴収する。
「複合表現演習Ⅰ、Ⅲ」と合わせて履修することを勧める。

■成績評価方法

出席と課題による総合評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	複合表現演習Ⅲ（取手） Seminar in Compound Expression III		
教員名	野口 実、木幡 和枝、八谷 和彦		
開講時期	集中	単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

「耳と心の森に入るー音楽表現とその領域」
西洋クラシック音楽の呪縛を解き、種々の社会、生活、労働、遊び、美意識を背景に生まれた民俗、民衆の音楽を題材に、音楽表現のコアを探る。100点余りの音源と映像により、社会環境の変容、美意識の変遷による表現の変貌と、交差する表現領域との確執を検証、音楽表現の領域について分析、考察し、音楽を軸とする複層的な表現演習を体感する。

■授業計画及び内容

講師：野口実（音楽家、開成高校講師）
※ 開講予定日と場所は集中講義履修登録時に確認する事。
I … 変貌する音楽表現
1) . エスニック・ミュージックの位相と表情
2) . クラシック音楽の系譜と表現
3) . 北米黒人音楽の発生とロック・ミュージックの潮流
II … 音楽表現の技法
1) . 時間感覚への介入
2) . 構造と形成プロセスの認知
3) . 情動・知覚のモデリング
4) . 記号と概念提示
III … 複層メディアの諸様態
IV … 創作演習に向けて（最終日に短いパフォーマンス/プレゼンテーションを予定）

■受講に当たっての留意事項

「複合表現演習Ⅰ、Ⅱ」と合わせて履修することを勧める。

■成績評価方法

出席と課題による総合評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	メディア概論（取手） Media Studies Basics		
教員名	樽沼 範久		
開講時期	通年	金曜 2	単位 4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生		
特記事項	学芸員・視聴覚教育メディア論（2単位）への振替可能		

■授業テーマ

「あらゆるメディアは私たちを完全に打ちのめす」（マーシャル・マクローハン『メディアはマッサージである』1967年）。しかしながら、いわゆる「メディア」も「メディア論」も飽和状態にあるように感じます。もはや私たちを興奮させたり、何か重要な予兆を伝えたりする響きを持っているとは思えません。では、「メディア概論」の意味はどこにあるのでしょうか。「樽沼概論」と呼ばれることもある「メディア概論」。しかし自分の知っていることよりむしろ、自分が知りたいことにむけて話をしたいと思っています。また、この授業の場所・時間自体を受講者たちの制作・行為へのメディア（媒介・触媒）に変容させたいという欲望も、毎年変わりません。私たちの心を心の底から、私たちの体を体の底から動かすもの、という意味でのメディア（媒介・触媒）。それが「メディア概論」の、ひとつの大きな主題だと考えています。

■授業計画及び内容

いろいろな困難が待ち構えているでしょうが、それでもなお、「様々な分野」の作品・言葉・事象を媒介に、「常に世界へと向う新たな視点」（取手 ART PATH 2012 ゲスト討論会【畠山直哉×樽沼範久】案内より）を受講者の皆さんとともに探求したいと願っています。私たち自身がこの世界に生き物として存在するという基礎から出発して、芸術を表現をメディアを考えていくのが基本姿勢です。昨年度は次のような授業を展開していきました（ひとつの主題が複数回にわたるときがあります）。「サンバとは何か」「メディアの定義～アルヴィン・ルシエの音実験を聴く」「人工－自然、複製について：自然史、ダーウィンの視座から」「塵埃について（1）（2）」（ルクレティウス、デュシャン、バタイユ、ギブソン、寺田寅彦、中谷宇吉郎、バイク、ラウシェンバーグ、野坂昭如、ももいろクローバーZなどを素材に）「ひとはいかにして作曲家になるか」「ひとはいかにして写真家になるか」「地球物理学者・寺田寅彦のサウンドトラック」「現代芸術は何と闘ってきたのか/何を求めてきたのか」、「ダンス（1）（2）：行為論からフォーサイズ、ポロックへ」「ダンス（3）：インプロヴィゼーションについて」「ダンス（4）（5）：土方巽」、「日記を考える：第五回恵比寿映像祭に向けて」（カント、内田百閒、ソング、メカス、バルト、河原温などを媒介に）「表現のくふるさと」についてー坂口安吾の視座から「表現と不可能性」（イサム・ノグチ、ドゥルーズ、リルケなどを媒介に）「表現と社会（1）：民主主義をめぐって」（チョムスキー、フーコー、ピンク・フロイドの言葉、そして衆議院議員総選挙を媒介に）「表現と社会（2）：Dumb Type pH」、土本典昭『原発切抜帖』を観る」「放射性物質と人間の尺度の乖離について」「芸術における否定性：アルヴォ・ペルトとジョン・ケージの場合」「ルイス・カーンの建築」「高嶺格のクールジャパン」（本人を招いての特別授業）。今年度は昨年度と同じ内容の反復もあるでしょうが、まだこの時点では世界に生じていない出来事（参加者の反応・質問を含む諸々の事象）に応じて新しい内容が加わることもあるはずだ。

■受講に当たっての留意事項

意味を頭で理解するだけでなく、授業に対して感覚・情動のレベルで反応したり、授業を契機に制作に新たに向かったりすることも理解のひとつだと考えています。各自の制作・探求における問いを持ちこんでほしいと思います。願うことならば、この講義を各自の制作・探求のための触媒にしてみたい。「探究者の社会では、人間は考えている。探究者としての人間（…）は無数の問題が出来する可能性の海に投げられるのだ」（マイケル・ボラニー『暗黙知の次元』1966年）。また、簡単に理解してしまうのは止めようと思います。「大体、私たちは理解しすぎて間違える」（ジャック・ラカン『フロイト理論と精神分析 技法における自我』1954-55年）。

■成績評価方法

出席（40%）、学期末レポート（40%）を予定。授業後に提出する紙も参考にします（20%）。なお、学期末レポートは「言葉採集（語録作成）」を構想中です。「メディア概論」の授業を踏まえつつ、先人

たちが「個々」の生のために「個」として表現してきた言葉を、自分の視座から採集し（分野は問いません）、採集者自身の言葉や編集も加味しながら、ひとつの方向性（意味）を備えた「語録」を制作する。表現媒体は文字のみならず映像・音声なども可能です。この作業は、過去の言葉のなかに未来の幻像を見つめることであり、過去の言葉や時代への認識を未来の言葉や認識に転じる準備をすることだと考えています。

■教科書／参考書

初回に説明します。また、参考になる書籍・論文や視聴覚資料は、授業の展開に応じて言及していきます。

■備考（オフィスアワー）

オフィスは横浜国立大学にあるため、質問などは当日に。

授業科目名	I MA 概論 A（取手） Inter Media: General Introduction A		
教員名	長谷部 浩、八谷 和彦、日比野 克彦、 佐藤 時啓		
開講時期	前期	水曜 1・2	単位 4
履修対象	美術・音楽学部生 ・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

先端芸術表現科常勤教員が、順次、それぞれの活動の紹介と共に、その背景となっている思想、考え方、方法論などについて講義する。

■授業計画及び内容

[長谷部 浩]

舞台芸術において、現在、直面しているさまざまな問題について考えます。

第一回：「リアリズムと様式について」

第二回：「演出権とはなにか 歌舞伎をめぐる諸問題」

第三回：「批評の果たすべき役割とはなにか」

[八谷和彦]

美術、デザイン、エンジニアリング、それぞれの違いと、それを横断するような活動について考えていきます。

[日比野 克彦]

自分自身の現在進行中の作品・アートプロジェクトを中心にその成り立ち、背景について語る。また過去に於いて行ってきた活動に関して、今との繋がりを含め、時代と共に移り変わってきたアートの社会における役割を検証していく。

[佐藤 時啓]

美術の制度から、制度を越えた表現への展開について、その歴史性と意味合いを考え我々の表現をさぐる。

第一回：自作を中心に、2次元と3次元の間を往来する表現とともに、現実の社会空間における芸術行為について、その可能性を考える。

第二回：美術館、画廊から野外空間、パブリックスペースへのアートの展開、そして写真のありようとの交差点について。

第三回：写真を中心とした今日の表現について。

■受講に当たっての留意事項

先端芸術表現科必修科目。他科、大学院生の履修、飛び入り受講も歓迎する。

■成績評価方法

出欠席を重視する。単位認定にあたっては、授業日数の2/3以上を必要とする。

■教科書／参考書

教員により、授業中、適宜指示する。

■備考（オフィスアワー）

授業終了後、直接教員と連絡をとること。

授業科目名	I MA 概論 B (取手) Inter Media: General Introduction B		
教員名	木幡 和枝、伊藤 俊治、たほ りつこ、 古川 聖		
開講時期	前期	木曜 1・2	単位 4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

先端芸術表現科常勤教員が、順次、それぞれの活動の紹介と共に、その背景となっている思想、考え方、方法論などについて講義する。

■授業計画及び内容

[古川 聖]

新しいメディアと音楽：

アートと科学技術との接点においてどのような表現、感性が開かれつつあるのか作品や実践例を見ていく。

現在の音楽のかたち：

今日我々は実に様々な音楽に接することができるが、それらの音楽を共時的、継時的に見ていった時に、創作者としての自分の立ち位置も出てくるかもしれない。現在の音楽のありようと自分との関係、距離について話す。

[木幡 和枝]

表現以前のアート。人間資源としてのアート。考えるアート。社会の先端としてのアート。技法を越えたアート(ダダ、シュルレアリスム、コンセプチュアル・アート、都市論、建築…)スライド、ビデオなどを活用してアート運動、アーティスト作品の 実例を検討しながら、背景となる社会状況と思想を考える。

[たほ りつこ]

地域における現代アートの始まりと展開の中から重要な概念を抽出しながら現代のアースワーク、環境芸術がもつ重要性と可能性を考察していく。

過去の作品や事例と共に作品の喚起力とリアリティ、現在の環境や状況における課題と芸術表現を具体的な実践の場を考える。

[伊藤 俊治]

アウトサイダーアートとプリミティブアートという2つの視点から20世紀、21世紀美術を再考する。

1. アウトサイダーアートの起源を求めて
2. プリミティブアートと民族学

■受講に当たっての留意事項

先端芸術表現科必修科目。他科、大学院生の履修、飛び入り受講も歓迎する。

■成績評価方法

出欠席を重視する。単位認定にあたっては、授業日数の2/3以上を必要とする。

■教科書／参考書

教員により、授業中、適宜指示する。

■備考(オフィスアワー)

授業終了後、直接教員と連絡をとること。

授業科目名	I MA 概論 C (取手) Inter Media: General Introduction C		
教員名	鈴木 理策、小谷 元彦、小沢 剛		
開講時期	後期	木曜 1・2	単位 4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

先端芸術表現科常勤教員が、順次、それぞれの活動の紹介と共に、その背景となっている思想、考え方、方法論などについて講義する。

■授業計画及び内容

[鈴木 理策]

写真と映画、写真と絵画、それぞれの境界線を意識して見ていくことで、写真とは何なのか、その魅力を考えて行きます。

[小谷 元彦]

彫刻というメディアに立脚点を置き、活動してきた経緯について。実制作の紹介とその背景。

「彫刻」メディアの遠心力・拡張と求心力・深部について。

■受講に当たっての留意事項

先端芸術表現科必修科目。他科、大学院生の履修、飛び入り受講も歓迎する。

■成績評価方法

出欠席を重視する。単位認定にあたっては、授業日数の2/3以上を必要とする。

■教科書／参考書

教員により、授業中、適宜指示する。

■備考(オフィスアワー)

授業終了後、直接教員と連絡をとること。

授業科目名	現代芸術概論（取手） Introduction to Contemporary Art			
教員名	木幡 和枝、小沢 剛			
開講時期	通年	火曜 2	単位	4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

21世紀に入り、芸術の世界も大きく変化しようとしている。芸術のジャンルや地理的、文化的な環境を見直そうとする動きが20世紀末から重要なうねりになっているし、芸術の意味や役割を洗い直そうとする方向も近年ダイナミックな展開を見せ始めている。芸術の作り手も受け手の層も変化し、芸術のステージも多様化している。そうした転換期の流れにノリながら現代芸術に新しい血や肉を与えようとするさまざまな実践や実験を伝えながら、人間の本質的な想像力と創造力の関係を探ってゆく。「近代芸術はゴヤが戦争の悲惨を描いたときを出発点とする」

■授業計画及び内容

現代芸術という言葉ほど曖昧で流動的な概念はないのではないだろうか。絵画、彫刻、映像、演劇、音響、パフォーマンス、ダンス、コンセプチュアル・アート、メディアアートまで多彩な表現行為にわたるその領域をカバーしながら、ここではその曖昧で流動的な概念に新しい道筋を見つけようと思う。その時注意したいのはまずあくまでも現在の視点を見失わないことである。もちろん過去の視点で現代を照射してゆくことも大切だが、ここでは現在から芸術を考えてゆくことを重視したい。ある作品や行為の時代背景を無視して現在の視点からイメージを切り取り、その本質を示す。過去の芸術の価値に対する批判的な意識を失わずにアクチュアルに行き続けているものを積極的にすくいだし、芸術の問題を再検証してゆく。巷から美術館まで実際の表現活動を見て議論する機会を数多く作ってゆく。

芸術は美学ではない。芸術を解釈するのではなく、その精神の奥深くへ分けいってゆくことをめざしたい。芸術は目に見えるすべてのものの形を、〈つかみがたきもの〉にふさわしい形に変えてしまう変形作用である、というアンドレ・マルローの言葉の意味を新しい文脈のなかで探求しようと思う。指定する展覧会、講演、パフォーマンスに行きレポート提出。通年のグループ自主研究、発表、冊子作成。講義。これを三分の一ずつ評価の対象とする。

■受講に当たっての留意事項

さまざまな作品や現象、事件や運動がここでは取り扱われるが、関係性の糸を見失わないように緊張感を持って受講して欲しい。また自分で新しい関係性の糸をつくりだしたり、発見したりする姿勢を常に保持して欲しい。

■成績評価方法

出席・レポート等

■教科書／参考書

トニー・ゴドフリー著、木幡和枝訳「コンセプチュアル・アート」、岩波書店 5040円 スーザン・ソントグ著、高橋康也ほか訳、「反解釈」、ちくま学芸文庫 1575円 スーザン・ソントグ著、木幡和枝訳「良心の領界」、NTT出版 2310円

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	アートプロジェクト運営論 Theory of Art project management			
教員名	伊藤 達矢			
開講時期	集中		単位	2
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

東京都美術館と東京藝術大学でおこなわれている「アートコミュニティー形成事業」（とびらプロジェクト）を授業の題材として取り上げる。

地域やアーティストが主体となって行われるアートプロジェクトの運営方法やその目的などについて理解を深め、オルタナティブスペースにおける展覧会開催に必要な知識を身につける。

また、表現行為そのものが一つの活動体として社会に接点を持つことを試みた様々な事例を紹介し、考察することで、アートの社会的役割についても見識を深める。

少人数で対話を通して授業を進めていきたいと考えています。具体的なプロジェクトの運営に携わっている学生については、活動の相談などにも乗ります。

■授業計画及び内容

アーティストが新しい表現の場と形を求めて地域社会を舞台に活動を展開している。

この授業ではこうしたアーティストの活動やその意味、またはそれを支える仕組みに焦点を当てる。

東京都美術館 × 東京藝術大学「とびらプロジェクト」との連携をはかり、美術館見学なども視野に入れる。

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

出席点とレポートの総合評価でおこなう。

■教科書／参考書

授業内で指示。

■備考（オフィスアワー）

t-ito@tobira-project.info

質問等については上記アドレスで受け付ける。

授業科目名	プレゼンテーション演習 Presentation workshop			
教員名	八谷 和彦			
開講時期	後期	水曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生（映像研究科性も受講可能）			
特記事項				

■授業テーマ

プレゼンテーションの基礎と手法について講義と演習を通して学ぶ。

■授業計画及び内容

コンピュータによるプレゼンテーション、スケッチブックによるプレゼンテーションなどを実施し、個人の制作活動とリンクしたプレゼンテーション能力を身につけることを目標とします。

演習授業なので、期間中2回、全員の前で発表する機会を設けます。（コンピュータを使った演習では、Keynote もしくはPowerPoint を使います。）

それらの操作に習熟している必要はありませんが、基本的なコンピュータの操作は修得しているほうが望ましいです）

■受講に当たっての留意事項

履修希望者多数の場合、抽選となる場合があります。

■成績評価方法

授業期間中、各人最低2回はプレゼンテーションの機会を設けます。その2回のプレゼンテーションの実施を採点上最も重視します。また、出席および他者のプレゼンテーションへの質問なども評価します。

（プレゼンテーションの内容ももちろん評価しますが、誠実に取り組むかどうかを重点的に見ます。）

■教科書／参考書

授業の中で適宜紹介します。

■備考（オフィスアワー）

E-mail hachiya@petworks.co.jp

授業の後に質問に来てもらってもかまいません。

授業科目名	工芸制作論（取手） Theory of Craft production			
教員名	小椋 範彦、内堀 豪			
開講時期	通年	火曜 2	単位	4
履修対象	工芸科1年必修			
特記事項				

■授業テーマ

工芸を制作の現場より考察する。各教員が自己の創作を通して工芸の本質を語る。

■授業計画及び内容

前期

- 第1回 ガイダンス 陶芸（1）
- 第2回 彫金（1）
- 第3回 鍛金（1）
- 第4回 鋳金（1）
- 第5回 漆芸（1）
- 第6回 染織（1）
- 第7回 木工芸（1）
- 第8回 ガラス造形（1）
- 第9回 彫金（1）
- 第10回 鍛金（2）
- 第11回 鋳金（2）
- 第12回 漆芸（2）
- 第13回 陶芸（2）
- 第14回 染織（2）

後期

- 第15回 工芸基礎（1）
- 第16回 彫金（3）
- 第17回 鍛金（3）
- 第18回 鋳金（3）
- 第19回 漆芸（3）
- 第20回 陶芸（3）
- 第21回 染織（3）
- 第22回 木工芸（2）
- 第23回 ガラス造形（2）
- 第24回 工芸基礎（2）
- 第25回 工芸基礎（3）
- 第26回 工芸基礎（4）
- 第27回 まとめ・レポート

■受講に当たっての留意事項

単位認定にあたっては出席を重視する。

■成績評価方法

出席とレポートによる総合評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

質問等は取手校地工芸合同教員室213B（工芸基礎教員室）にて受け付ける。TEL 050-5525-2575

授業科目名	素材表現演習Ⅰ（金工）（取手） Seminar of expressions with materials(Metal working)			
教員名	篠原 行雄、坂本 至、田中 航			
開講時期	前期	木曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

作品制作を通じて金属加工についての基礎知識と、造形表現を行うための総合的な技術と感覚を養うことを目標とする。授業内容は、各種金属の特性や材料の製造規格等の説明から、実作業を通しての「切断・折り曲げ・接合（溶接・溶断含む）」等の基礎的の金属加工技術の習得。素材としての可能性を探りながらのテーマに沿った作品制作。

■授業計画及び内容

○金属、加工概論

- ・概要
- ・金属素材について
 - ・種類
 - ・特性
 - ・規格
- ・金属加工法について
 - ・切断
 - ・折り曲げ
 - ・電気溶接／溶断
基本となる加工法の説明
- ・その他
仕上げ処理等の説明

○実材実習

- ・基本加工実習
 - ・課題制作
- 第1週 ガイダンス、工具取扱い説明、及び安全講習会
 第2週 基本加工実習、材料切り出し、テストピース制作開始
 第3週 ↓
 第4週 制作プラン検討、ラフスケッチチェック
 第5週 制作
 第6週 ↓
 第7週 ↓
 第8週 ↓
 第9週 ↓
 第10週 ↓（最終仕上げの検討、金属表面仕上げ処理等説明）
 第11週 ↓
 第12週 ↓
 第13週 ↓（仕上げ加工段階）
 第14週 組み立て、仕上げ加工
 第15週 講評（作品プレゼンテーション及びディスカッション）

■受講に当たっての留意事項

実習費が必要。受講者数10名。第1回目授業では、ガイダンス及び安全講習を行うので、必ず出席すること。また無断欠席・遅刻等は厳禁。授業詳細等は履修登録期間中に対応します。

■成績評価方法

出席、平常の学習評価、提出作品の評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

月～金 13時～17時 取手校地・共通工房棟2F / 金工工房・金工機械室まで（内線7401・外線050-5525-2632）

授業科目名	素材表現演習Ⅱ（铸造）（取手） Seminar of expressions with materials(Modeling&MetalCasting)			
教員名	橋本 明夫、見目 未果、森崎 靖徳			
開講時期	前期	水曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

铸造により金属に置換された各自の思考や感覚またその表象等を照合する事で、表現における素材の意味や作品制作時の認識等について再考察を試みる。授業の形態としては、各々の表現意図及び製作条件等を考慮した上での原形制作と鋳型製作及び金属の溶解と铸造、更に仕上げ加工等の実作業を通じた作品制作を行う。

■授業計画及び内容

○铸造概論

- ・概要
- ・铸造技法について
- ・鋳型材料について
- ・金属素材について
- ・その他

○実材実習

- 「铸造（鋳物）を表現手段に用いた作品制作」
- ・石膏等による原形の制法
 - ・生砂による鋳型製作技法
 - ・銅合金の溶解と鋳造作業
 - ・鋳物の仕上げ加工と表面処理法

○作品素材

- ・青銅、黄銅、等

- 第1週 ガイダンス、铸造概論、铸造法実演
 第2週 テスト鋳造（素材の観察と製法法の体験）
 第3週 ↓
 第4週 制作プランの検討（エスキース）
 第5週 制作プランの決定（レンダリング）
 第6週 原形制作
 第7週 ↓
 第8週 ↓
 第9週 鋳型製作、鋳造
 第10週 ↓
 第11週 ↓
 第12週 仕上げ加工、表面処理
 第13週 ↓
 第14週 提示方法等の検討
 第15週 プレゼンテーション／講評
 （休日や学事暦等により授業日程に変更有り）

■受講に当たっての留意事項

実習費が必要である。受講者10名程度とする。作業行程上、実習時間を延長する場合がある。

■成績評価方法

平常の学習評価と提出作品の評価。

■教科書／参考書

資料及び参考書籍等がある場合は実習時に適宜配布、又は提示する。

■備考（オフィスアワー）

月～金曜日 9:30～16:40 取手校地共通工房 金工工房・鋳造室 内線（取手校地）7404 外線050-5525-2635

授業科目名	素材表現演習Ⅲ（七宝）（取手） Seminar of expressions with materials(Metal enameling)			
教員名	前田 宏智、井上 菜恵子、前田 恭兵			
開講時期	前期	月曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

七宝素材（金属にガラス粉を焼き付けること）による実習を通じ、基礎知識、各種技法の習得・色彩造形を体験・探求する。

■授業計画及び内容

○七宝技法概論

- ・概要
- ・胎について（種類、加工方法）
- ・釉薬について（種類、色の合わせ方）
- ・各種技法について（種類、工程）
- ・作品の実際（スライド等）
- ・その他

○実材実習

「七宝技法による平面作品の制作」
 ・与えられた材料を使用し、有線七宝技法による平面作品を制作。テーマ等は自由。

材料 純銅板（約150×100mm）、七宝釉薬、銀線

- | | | |
|------|---------------------|----|
| 第1週 | ガイダンス、七宝技法概論 | |
| 第2週 | エスキースチェック、素地作り、下地焼成 | |
| 第3週 | 銀線植線 | |
| 第4週 | 〃 | |
| 第5週 | 〃 | 焼成 |
| 第6週 | 釉薬施釉 | |
| 第7週 | 〃 | |
| 第8週 | 〃 | 焼成 |
| 第9週 | 釉薬施釉 | |
| 第10週 | 〃 | 焼成 |
| 第11週 | 釉薬施釉 | |
| 第12週 | 〃 | 焼成 |
| 第13週 | 研磨 | |
| 第14週 | 〃 | |
| 第15週 | 仕上げ、終了、講評 | |
- （休日や学事歴等により授業日程に変更あり）

■受講に当たっての留意事項

実習費が必要である。受講者13名とする。

■成績評価方法

平常の学習評価と提出作品の評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

月～金曜日 10:00～17:00 取手校地共通工房 金工工房金属表面処理室 内 7405（上野からかける時は）# 9 2636 外線 050-5525-2636

授業科目名	素材表現演習Ⅳ（木材）（取手） Seminar of expressions with materials(Wood Working)			
教員名	菌部 秀徳、滝澤 水瑠、藤原 洋人			
開講時期	前期	水曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

与えられた木材を出発点とし、素材的、工作的特性を理解しながら、それぞれ自由に木材造形作品を制作する。様々な工程を通して、木材の性質、技術の意味、作品表現について認識を深めることを目的とする。

■授業計画及び内容

○木材加工概論

- ・材料について
- ・工具・道具について
- ・機械について

○実材実習

- ・刃物研磨技法
- ・木材切削技法
- ・鋸挽き技法
- ・彫刀技法
- ・仕上げ技法

- | | |
|------|---------------------|
| 第1週 | ガイダンス スライドレクチャー |
| 第2週 | 安全講習 材料の選択 モデルエスキース |
| 第3週 | モデルエスキース（図面チェック） |
| 第4週 | 制作 |
| 第5週 | 〃 |
| 第6週 | 〃 |
| 第7週 | 〃 |
| 第8週 | 中間エスキース |
| 第9週 | 制作 |
| 第10週 | 〃 |
| 第11週 | 〃 |
| 第12週 | 〃 |
| 第13週 | 〃 |
| 第14週 | 〃 |
| 第15週 | 清掃ののち講評 |

■受講に当たっての留意事項

実習のため別途材料費が必要となります。受講者数は10名とします。なお、詳細に関しては、履修登録期間中のガイダンス及びオフィスアワーに指示します。

■成績評価方法

平常の学習評価と提出作品の評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

月～金（10:00～12:00）取手校地共通工房 木材造形工房 内線 7406 外線 050-5525-2637

授業科目名	素材表現演習V (塗装) (取手) Seminar of expressions with materials (URUSHI technique)			
教員名	小椋 範彦、青木 伸介、玉川 みほの			
開講時期	前期	木曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

天然の素材である漆の基本的な知識・性質・扱い方・技法を学ぶ。色彩、質感の表現を研究、模索し、平面作品として完成させる。

■授業計画及び内容

○漆芸技法概論

- ・概要
- ・漆について (特性、取り扱い方)
- ・加飾について (技法・工程)
- ・その他

○実材実習

「漆芸法による平面作品の制作」

- ・平面 (漆塗り板) に研出し蒔絵、螺鈿、卵殻などの技法で自由に表現する。

○材料

漆塗り板、漆、顔料、漆芸素材、その他

- 第1週 ガイダンス、漆芸技法概論、課題説明
 第2週 色漆作り、エスキースチェック
 第3週 下絵作り
 第4週 漆塗面研ぎ、下絵写し
 第5週 下地作り
 第6週 各自デザインに合わせ制作
 第7週 蒔絵、螺鈿、卵殻など
 第8週 ↓
 第9週 ↓
 第10週 ↓
 第11週 ↓
 第12週 ↓
 第13週 ↓
 第14週 磨き、仕上げ
 第15週 清掃、講評

■受講に当たっての留意事項

実習費が必要である。受講者10名とする。

■成績評価方法

平常の学習評価と提出作品の評価。

■教科書／参考書

漆の知識に関するレジュメを配布

■備考 (オフィスアワー)

月～金曜日 10:00～17:00 取手校地共通工房 塗装造形工房
 内 7408 外線 050-5525-2639

授業科目名	素材表現演習VI (石材) (取手) Seminar of expressions with materials (Stone working)			
教員名	工藤 晴也、武田 充生、三矢直矢			
開講時期	前期	水曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

石材に関わる加工技術の習得と各自のエスキースに基づいた小品の制作。

■授業計画及び内容

○石材基礎概論

- ・石の種類について
- ・石の性質について
- ・道具と加工技術について
- ・大型機械の説明

○石材実習

- ・各自のエスキースに基づいた制作
- ・原石の割り方
- ・電動・エア工具による石材加工方法
- ※ 作品完成後、作品の撮影を行い、ファイルの制作までを課題とする。

- 第1週 ガイダンス・講義
 第2週 大型機械安全講習
 第3週 電動・エア工具安全講習
 第4週 エスキースの制作と材料の選択
 第5週 エスキースに基づいた制作
 第6週 ↓
 第7週 ↓
 第8週 ↓
 第9週 ↓
 第10週 ↓ 中間講評
 第11週 ↓
 第12週 ↓
 第13週 講評

■受講に当たっての留意事項

実習費が必要である。受講者12名とする。

■成績評価方法

平常の学習評価と提出作品の評価。

■教科書／参考書

■備考 (オフィスアワー)

月～金曜日 13:30～17:00 取手校地共通工房 石材工房 内
 7409 外線 050-5525-2640

授業科目名	ガラス工芸演習（取手） Exercise of P_te de verre			
教員名	藤原 信幸、海藤 博、奥田 康夫			
開講時期	前期	水曜 1・2	単位	4
履修対象	美術・音楽学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

ガラスの成形技法の一つであるパート・ド・ベールの演習を行う。パート・ド・ベールとは粉末や粒状のガラスを耐熱石膏の鋳型に詰め、電気炉の中で加熱溶解して成形し、徐冷後、石膏型から取り出して仕上げる方法である。これに附随して必要な「ガラスの歴史概要」「ガラスの製法」等について講義する。

■授業計画及び内容

前期

第1週 オリエンテーションの授業を行うため、できるだけ参加すること。

自己紹介、この授業で制作したい作品のイメージをプレゼンテーションしてもらう。

パート・ド・ベールの技法工程説明

ガラスについての概要

第2週 実材実習

課題に沿ったエスキース（着色）

色サンプルよう型作りー石膏の扱い方

第3週 エスキースに基づく制作

↓

第12週

第13週 プレゼンテーション／講評 レポート提出

■受講に当たっての留意事項

- ・実習費が必要。受講者10名。無断欠席不可。
- ・工芸基礎1年の実習室を使用させていただくため、実習後は清掃すること。

■成績評価方法

平常の学習評価及び提出作品、レポートの評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

月～金曜日 14:00～16:00 ガラス造形教員室 内7355 外線050-5525-2578

授業科目名	ステンドグラス実習（取手） Practice in Stained-Glass			
教員名	鶴身 美友、中野 竜志			
開講時期	前期	木曜 1・2	単位	4
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

- *ステンドグラス古典技法の修得
- *建築空間と光による表現について

■授業計画及び内容

○ステンドグラス技法概論

- ・ステンドグラスの定義
- ・ステンドグラスの歴史
- ・建築様式との関わりについて
- ・アンティークガラスの素材と製法
参考映像DVD「サンジェスト・ガラス工場」
- ・制作に使用する道具について
- ・制作工程説明

○ステンドグラス制作

- ・原画選定（12世紀～15世紀の作品資料より）
- ・ガラスのカット方法説明
- ・焼絵付け技法の修得
線描き：グリザイユ（酢溶き）
調子付け：グリザイユ（水溶き）
部分着色：シルバーステイン
- ・焼成窯使用説明
- ・鉛椀による組立工程、半田付け、パテ詰め、磨き、完成に至る一連の作業。
- ・ステンドグラスによる光と空間を考察する。
- ・現代建築における表現の可能性について考察する。

第1週 ガイダンス、スライドレクチャー

第2週 原画選定、トレース、型紙作成

第3週 ガラス切り開始

第4週 ガラス切り終了

第5週 グリザイユ線描き

第6週 グリザイユ線描き焼成

第7週 窯出し、グリザイユ調子付け

第8週 グリザイユ調子付け焼成

第9週 窯出し、シルバーステイン焼成

第10週 窯出し、鉛椀組み作業開始

第11週 鉛椀組み作業

第12週 鉛椀組み作業終了

第13週 半田付け、パテ詰め

第14週 磨き、仕上げ

第15週 講評

■受講に当たっての留意事項

教材費が必要である。（約一万円。後日掲示します。）受講者は12名とする。
希望者が12名を超えた場合は抽選とします。

■成績評価方法

平常の学習評価と提出作品の評価。

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

（月）～（金） 9:30～17:00 取手校地 壁画研究室

専門基礎科目（芸術情報センター）

授業科目名	芸術情報概論 A Introduction to Information Art A			
教員名	荻宿 俊文			
開講時期	前期	金曜 5	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項	A, B いずれか1つを履修			

■授業テーマ

本科目では、学校教育の教育職に留まらず、社会での活動しているアーティストの活動やワークショップなど広義の教育活動に関心を持っている学生を対象とする。内容は、「教養としての教育学」を基盤として、アーティストと教育職の関係をアートとコミュニケーションとメディアの3つの視座から論考していきたい。授業では、講義、グループワークなど多様な方法を取り入れ、学校教育の授業や美術館や公民館などで展開しているワークショップなどの実践的な教授法のイメージできることをめざしていく。同時に、様々なメディア情報機器の操作を学習する。

■授業計画及び内容

- この講座の学び方
- 教養としての教育学 (1) 近代学校の成立と呪縛という問い
- 教養としての教育学 (2) 日本の先生はなぜ自分のことを先生と呼ぶのか
- 教養としての教育学 (3) これからの公教育としてのシチズンシップ
- アーティストと教育職 (1) 社会に埋め込まれているアートの可能性
- アーティストと教育職 (2) 劇場法成立後のアーティストの生き方
- アートとコミュニケーション教育 (1) アウトリーチの協働性
- アートとコミュニケーション教育 (2) アウトリーチの身体性
- アートとコミュニケーション教育 (3) アウトリーチの即興性
- ワークショップデザインの現在 (1) 参加との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (2) 体験との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (3) 身体との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (4) 意図との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (5) 時間との出会いを味わう
- この講座を学んだ自分を俯瞰すること

■受講に当たっての留意事項

前向きな姿勢と批判的な姿勢のバランスを考えていくことを可能なら求めていきたい。

■成績評価方法

レポート、講義やグループワークへの貢献など総合的に評価する。

■教科書／参考書

下記以外の参考図書は授業で適宜紹介する
 荻宿俊文他編著『まなびを学ぶ』(ワークショップと学び1) 東大出版会、2012年
 荻宿俊文他編著『まなびほぐしのデザイン』(ワークショップと学び3) 東大出版会、2012年
 N. ベーリー『キッズ・サバイバル 生き残る子供たちの「アートプロジェクト」』フィルムアート社、2001年
 矢野智司『贈与と交換の教育学 漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』東大出版会、2008年
 佐藤学他『子どもの想像力を育む アート教育の思想と実践』東大出版会、2003年

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	芸術情報概論 B Introduction to Information Art B			
教員名	荻宿 俊文			
開講時期	後期	金曜 5	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項	A, B いずれか1つを履修			

■授業テーマ

本科目では、学校教育の教育職に留まらず、社会での活動しているアーティストの活動やワークショップなど広義の教育活動に関心を持っている学生を対象とする。内容は、「教養としての教育学」を基盤として、アーティストと教育職の関係をアートとコミュニケーションとメディアの3つの視座から論考していきたい。授業では、講義、グループワークなど多様な方法を取り入れ、学校教育の授業や美術館や公民館などで展開しているワークショップなどの実践的な教授法のイメージできることをめざしていく。同時に、様々なメディア情報機器の操作を学習する。

■授業計画及び内容

- この講座の学び方
- 教養としての教育学 (1) 近代学校の成立と呪縛という問い
- 教養としての教育学 (2) 日本の先生はなぜ自分のことを先生と呼ぶのか
- 教養としての教育学 (3) これからの公教育としてのシチズンシップ
- アーティストと教育職 (1) 社会に埋め込まれているアートの可能性
- アーティストと教育職 (2) 劇場法成立後のアーティストの生き方
- アートとコミュニケーション教育 (1) アウトリーチの協働性
- アートとコミュニケーション教育 (2) アウトリーチの身体性
- アートとコミュニケーション教育 (3) アウトリーチの即興性
- ワークショップデザインの現在 (1) 参加との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (2) 体験との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (3) 身体との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (4) 意図との出会いを味わう
- ワークショップデザインの現在 (5) 時間との出会いを味わう
- この講座を学んだ自分を俯瞰すること

■受講に当たっての留意事項

前向きな姿勢と批判的な姿勢のバランスを考えていくことを可能なら求めていきたい

■成績評価方法

レポート、講義やグループワークへの貢献など総合的に評価する。

■教科書／参考書

下記以外の参考図書は授業で適宜紹介する
 荻宿俊文他編著『まなびを学ぶ』(ワークショップと学び1) 東大出版会、2012年
 荻宿俊文他編著『まなびほぐしのデザイン』(ワークショップと学び3) 東大出版会、2012年
 N. ベーリー『キッズ・サバイバル 生き残る子供たちの「アートプロジェクト」』フィルムアート社、2001年
 矢野智司『贈与と交換の教育学 漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』東大出版会、2008年
 佐藤学他『子どもの想像力を育む アート教育の思想と実践』東大出版会、2003年

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	C A D 図法演習 I Computer Aided Design Drawing I			
教員名	館 知宏			
開講時期	前期	金曜 4	単位	2
履修対象	学部生・大学院生 (建築科1年必修)			
特記事項				

■授業テーマ

コンピュータ支援による設計はCAD(Computer Aided Design)と呼ばれ、建築を含むあらゆる分野の設計と製作に幅広く用いられている。この授業では CAD 実習および模型製作を通して、平面および立体図形の幾何学的性質・形状処理を理解し、図的な思考・創造能力を養う。

■授業計画及び内容

- 第1回：イントロダクション
- 第2回：CADの基本概念
- 第3回：二次元図法幾何
- 第4回：二次元モデリング実習
- 第5回：三次元モデリング実習
- 第6回：曲面幾何・展開
- 第7回：曲面モデリング実習
- 第8回：模型製作
- 第9回：講評
- 第10回：投影・透視投影
- 第11回：ビジュアライゼーション実習
- 第12回：ビジュアライゼーション実習
- 第13回：講評
- 第14回：進度調整のための予備日
- 第15回：進度調整のための予備日

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

ノイズアーキテクト著『Rhinoceros + Grasshopper 建築デザイン実践ハンドブック』彰国社、2011年
 高橋研究室『かたちのデータファイル デザインにおける発想の道具箱』彰国社、1984年
 宮崎興二『建築のかたち百科 多角形から超曲面まで』彰国社、2000年

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	C A D 図法演習 II Computer Aided Design Drawing II			
教員名	豊田 啓介、大野 友資、堀川 淳一郎			
開講時期	後期	金曜 4	単位	2
履修対象	学部生・大学院生 (建築科1年必修)			
特記事項				

■授業テーマ

CAD 図法演習 II では、Rhinoceros と Grasshopper を基本ソフトウェアとして、建築設計における実践的なモデリング手法や、それらをプラットフォームとした最新の応用的なデジタルデザイン手法を学ぶ。

■授業計画及び内容

- 第1回：総論：デジタルデザイン・アプリケーション概論、授業概要
- 第2回：ライノセラス復習：ライノの基本操作確認、モデリング演習
- 第3回：グラスホッパー①：グラスホッパーの基本操作
(グラスホッパーの動かし方)
- 第4回：グラスホッパー②：グラスホッパーの基本操作
(グラスホッパーを使ったモデリング)
- 第5回：課題①：授業内で演習
- 第6回：グラスホッパー③：グラスホッパーの基本操作
(データの取扱い)
- 第7回：グラスホッパー④：グラスホッパーの基本操作
(データツリー1)
- 第8回：グラスホッパー⑤：グラスホッパーの応用操作
(データツリー2)
- 第9回：グラスホッパー⑥：グラスホッパーの応用操作
(パラメトリックデザイン)
- 第10回：課題②-1：授業内で演習、宿題
- 第11回：課題②-2：宿題提出、講評
- 第12回：グラスホッパー⑦：グラスホッパーの応用操作
(プラグイン等)
- 第13回：課題③-1：グループ課題発表／グループ登録。
ライノを使ったダイアグラムの作り方
- 第14回：課題③-2：授業内で演習、エスキス
- 第15回：課題③-3：グループ課題講評

■受講に当たっての留意事項

アプリケーションを習得するにあたり、講義時間以外にも演習課題に取り組める時間的余裕を考慮することが望ましい。

■成績評価方法

出席および設計製作演習での成果

■教科書／参考書

ノイズアーキテクト著『Rhinoceros + Grasshopper 建築デザイン実践ハンドブック』彰国社、2011年
 ＊コマンドなどを詳しく説明する時間がないので、授業には必ず持ってくることを。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	芸術情報演習 (デザイン) Seminar in Information Art			
教員名	小川 裕子、田所 淳			
開講時期	通年	木曜 3	単位	4
履修対象	学部生 (デザイン科2年)			
特記事項				

■授業テーマ

(DTP)

DTP (Desktop Publishing) の基礎的な技術と知識を習得する授業です。印刷物を制作するには DTP ソフトの習得だけでなく、文字組、画像加工、入稿データの作成方法など印刷に関する知識が必要となります。この授業では、印刷物の制作を通して DTP に必要な一連の基礎的な知識の習得を目的とします。

DTP の現場で主に使用されている Adobe Illustrator, Photoshop を使って授業を行います。

前半に DTP の基礎を習得し、後半はその応用としての制作になります。

(Web)

HTML と CSS で作る、Web サイト制作の基礎。

HTML (= Hyper Text Markup Language) は、Web の文書の構造を記述するための言語です。また、CSS (Cascading Style Sheet) は HTML で構造化した文書の体裁やデザインを記述するための方式です。この授業はこの2つの仕組みを駆使して、Web サイトをデザインするための基礎技術の習得を目的とします。

HTML と CSS は、現在も様々な機能を取り入れながら進化しています。この授業では、HTML と CSS の基礎を押さえながら、今後の標準となっていくと思われる最新の機能 (HTML5 や CSS3) も紹介しながら、表面的な見た目だけの Web デザインではなく、その構造を深く理解した上で Web サイトを制作できるようになることを目標にしていきます。

講義の前半で、まず HTML と CSS について技術的な内容を理解します。後半は実践編として架空のイベント告知サイトの作成を通して、Web サイトを制作するためのプロジェクトの企画立案から設計、さらにソーシャルメディア (Twitter, Facebook, Google+ など) との連携などを考慮しながら、実際に Web サイトを制作し公開します。

■授業計画及び内容

(DTP)

第1回：印刷物の制作行程 / DTP の基礎知識

第2回：画像加工

第3回：画像加工

第4回：文字組

第5回：文字組

第6回：地図制作 (作図)

第7回：地図制作 (作図)

第8回：グリッドシステムについて

第9回：入稿データの作り方

第10回：制作物の企画 / ラフスケッチ

第11回：制作 (1)

第12回：制作 (2)

第13回：制作 (3)

第14回：制作 ((出力 / 校正) / 入稿データ作成)

第15回：課題提出

(Web)

* ガイダンス、Web 概論

* HTML (1) : HTML とは何か、HTML の基本構造、段落、見出し

* HTML (2) : ハイパーリンク、インライン画像

* HTML (3) : リスト、テーブル、引用

* CSS (1) : CSS 入門

* CSS (2) : セレクタ詳細、ボックスモデル

* CSS (3) : CSS レイアウト、CSS によるデザイン実践

* 中間課題講評会 : 自己紹介のページを HTML と CSS でつくる

* Tumblr 入門 : Tumblr とは何か?

* 実践 : Tumblr でイベント告知 Web サイトを作る - プロジェクト企画と設計

* 実践 : Tumblr イベント告知 Web サイトを作る - ワイヤフレームの制作、更新計画の策定

* 実践 : Tumblr イベント告知 Web サイトを作る - Web サービスを利

用、様々なメディアを扱う

* 実践 : Tumblr イベント告知 Web サイトを作る - ソーシャルメディアとの連携、ソーシャルグラフ

* 実践 : サイト制作実習

* 最終講評会

■受講に当たっての留意事項

本講義は美術学部デザイン科学部2年生を対象とした必修授業です。

Mac の基本操作 (マウスの操作、文字の入力、ファイルやフォルダの操作) は理解している前提で授業を行います。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出 (中間課題・最終課題) の内容を総合的に評価します。

■教科書 / 参考書

(DTP)

授業中に配布する資料

* 推薦図書などは授業中に紹介します

(Web)

授業資料は Web サイト (<http://yoppa.org/>) に掲載します。

参考図書 :

* 「Web デザインメソッド」矢野りん、ワークスコーポレーション

* 「IA100- ユーザエクスペリエンスデザインのための情報アーキテクチャ設計」長谷川敦士、ビー・エヌ・エヌ新社

* 「Designing Tumblr デザイニング・タンブラー」古屋 蔵人、高岡 謙太郎、ビー・エヌ・エヌ新社

■備考 (オフィスアワー)

(DTP)

質問等はメールでも受け付けます。

ogawa.hiroko@noc.geidai.ac.jp

授業科目名	芸術と情報 Art and Media			
教員名	藤幡 正樹			
開講時期	後期	水曜 3	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

芸術と情報の関係について、さまざまな角度から考察を進めます。授業の進め方としては、講義と事例研究をセットとして、適宜映像素材の上映やゲストを交えての具体的な事例を紹介してゆきます。特に対象の情報化、情報の可視化、アルゴリズム等について概説するとともに、歴史的な理解として戦後のメディアの変容などを取り込み、それに沿って具体的に映像、写真、マルチメディア、インタラクティブメディア作品等の事例を紹介します。

■授業計画及び内容

1. 導入
2. 講義 [1] 芸術という情報 (参照：M. ハイデガー)
3. 講義 [2] 記号とイメージ (参照：M. フーコー)
4. 講義 [3] 記号の変遷
5. 事例研究 [1] ワークショップ
6. 講義 [4] 計算とアルゴリズム
7. 講義 [5] 情報とメディア
8. 講義 [6] インターネット
9. 事例研究 [2] ゲスト
10. 講義 [7] 現代芸術と情報
11. 講義 [8] 映画映像論
12. 講義 [9] マンガ・アニメ
13. 事例研究 [3] ゲスト
14. 事例研究 [4] ワークショップ
15. まとめ

■受講に当たっての留意事項

授業の進捗状況等により授業計画及び内容は変更することがある。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出の内容を総合的に評価する。

■教科書／参考書

教科書、参考書は適宜、配布ないし指定する。

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	情報メディア学 Information and Media			
教員名	江渡 浩一郎			
開講時期	前期	水曜 3	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

Twitter や Facebook といったソーシャルメディアは、私たちの生活の一部となった。ニコニコ動画には日夜ユーザが作った動画がアップされている。そのような「情報メディア」は、一体どのような形で作られてきたのだろうか。これまでの情報メディアの歴史や理論的背景を学び、情報メディアを活用する実践的な能力を育成する。コンピュータを用いた表現を行う上での情報と芸術をめぐる基礎知識、技能、メディア・リテラシーを習得する。最終的には自分たち自身のメディアを作ることを目標とする。

■授業計画及び内容

1. 全体俯瞰：情報メディア学の内容全体を俯瞰する
2. メディアリテラシー：ソーシャルメディアを用いて進めていく
3. モダニズム芸術：芸術を支える基盤である媒体への注目
4. 科学技術と芸術：媒体を進化させる科学技術の進歩と表現
5. サイエンスアート：科学技術の進展と表現への応用
6. インタラクティブアート：相互作用を含んだ芸術概念の誕生
7. メディアアート：媒体そのものを対象として扱う芸術
8. メタメディア：エンゲルバートやアラン・ケイらの業績
9. インターネットアート：インターネットを用いた芸術
10. ハッキングアート：メディアを破壊することでその特性を明らかにする
11. ソーシャルメディア：人と人をつなげる芸術
12. Wiki、集合知：さまざまな人の知見を集積するメディア
13. ユーザインタフェース：機械を使いやすくする工夫の集積
14. ユーザ参加型メディア：ユーザの参加を促すメディア
15. 未来のメディア：これからのメディアについて考察する

■受講に当たっての留意事項

ソーシャルメディアを活用して進めていく予定。パソコンやスマートフォンを使いこなせることを前提とする。

■成績評価方法

出席、レポート、課題、テストで評価する予定。

■教科書／参考書

江渡浩一郎『パターン、Wiki、XP』技術評論社、2009年
江渡浩一郎『ニコニコ学会 β を研究してみた』河出書房、2012年
Noah Wardrip-Fruin, Nick Montfort, "The New Media", The MIT Press, 2003.

■備考 (オフィスアワー)

授業の後に話をする時間を設ける。担当教員の研究テーマは <http://eto.com/lab/> を参照。

授業科目名	情報編集 (WEB) Web Design			
教員名	田所 淳			
開講時期	前期	火曜 3	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

Web の技術を駆使して、情報を表現し発信する。
現在、情報を伝達するための手段として Web は欠かすことのできないメディアとなっています。しかし、Web は単純な情報の伝達手段を越えた表現のためのメディアとしての大きな可能性を秘めています。Web ブラウザの進化、Web に関連する様々なテクノロジーの進歩によって、Web を用いた表現の幅は日々拡張されています。この授業では、Web を表現のためのメディアと捉え、様々な技術を学びながらその可能性を探っていきます。最終的に自分自身で Web を用いて表現し発信できることを目標とします。

■授業計画及び内容

- * オリエンテーション：Web をめぐるここ数年の状況
- * HTML、CSS の基礎についての確認
- * HTML5 (1)：文書の構造化のための新要素
- * HTML5 (2)：音声、動画などマルチメディアのための新要素
- * CSS 3 (1)：CSS3 による Web デザイン 1
- * CSS 3 (2)：CSS3 による Web デザイン 2
- * 中間課題「HTML5 と CSS3 による Web デザイン」講評
- * Web サービスの活用 (1)：写真、動画の共有
- * Web サービスの活用 (2)：ソーシャルメディアの活用
- * jQuery (1)：jQuery とは、簡単なアニメーションを作成
- * jQuery (2)：jQuery のプラグインの活用
- * jQuery (3)：フォトギャラリーを作る
- * jQuery (4)：jQuery を活用した GUI の制作
- * 様々なメディアを利用した、Web 表現の実践
- * 最終課題講評会

■受講に当たっての留意事項

HTML と CSS の初歩について、理解していることを前提にします。また、Mac の基本操作 (マウスの操作、文字の入力、ファイルやフォルダの操作) は理解している前提で授業を行います。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出 (中間課題・最終課題) の内容を総合的に評価します。

■教科書／参考書

授業資料は Web サイト (<http://yoppa.org/>) に掲載します。
羽田野太巳『徹底解説 HTML5 マークアップガイドブック 最終草案 対応版 全要素・全属性完全収録』秀和システム、2011 年
西畑一馬『Web 制作の現場で使う jQuery デザイン入門』アスキー・メディアワークス、2013 年

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	インタラクティブ・ミュージック I Interactive Music I			
教員名	松村 誠一郎			
開講時期	前期	木曜 4	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

この講義では、グラフィカルプログラミング環境である Pure Data の拡張版、Pd-extended を使ってサウンドプログラミングの基礎を学びます。音のデータの取り扱いと加工、シンセサイザープログラムの制作、アルゴリズムを使った作曲などが主なテーマです。また、中盤以降は MIDI 接続のキーボード、カメラ、ネットワーク等を使い、コンピュータの外部と内部のインタラクションを実現させるプログラム制作を行ないます。

■授業計画及び内容

1. ガイダンス
2. Pure Data の紹介、基本操作
3. サンプリングの基礎と応用
4. シンセサイザープログラムの制作 (音の合成と発振)
5. エフェクトの制作
6. MIDI 接続とアルゴリズムを使った作曲
7. 中間課題制作
8. 中間課題発表
9. GEM で映像と画像を扱う
10. 物理モデルと映像
11. カメラの活用
12. ネットワーク接続
13. インターフェイスを作る (ストラクチャ)
14. 最終課題制作
15. 最終講評会

■受講に当たっての留意事項

Mac の基本操作 (マウスの操作、文字入力、ファイルやフォルダの操作) は理解している前提で授業を行います。作曲のスキル、音楽経験はまったく問いません。

■成績評価方法

授業の履修態度、課題提出 (中間課題・最終課題) の内容を総合的に評価します。

■教科書／参考書

毎回の授業資料はダウンロード可能とします。
教科書：(初級者向け)
松村誠一著『Pd Recipe Book Pure Data ではじめるサウンドプログラミング』BNN 新社、2012 年

■備考 (オフィスアワー)

Pd-extended は最新版 (バージョン 0.43.4 : 2013 年 2 月 1 日時点) を使用します。
puredata.info でダウンロード可能。

授業科目名	インタラクティブ・ミュージック II Interactive Music II			
教員名	田所 淳			
開講時期	後期	木曜 4	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

インタラクティブなサウンドプログラミングの応用と実践。
この講義では、前期に開講される「インタラクティブ・ミュージック I」の内容を踏まえて、さらに実践的にサウンドプログラミング技術の理解を深めます。演習は教室での講義と AMC ウッドデッキでのパフォーマンス実習を交互に行いながら、実践的にサウンドプログラミングを習得します。プログラミングの環境としては、フリーウェア (GPL ライセンス) として入手可能な音響合成用プログラミング環境および言語である SuperCollider を用います。演習の最後は履修者全員でライブイベントを企画し、外部で発表を行います。

■授業計画及び内容

- * ガイダンス
- * SuperCollider 1-1: イントロダクション
- * SuperCollider 1-2: サウンドシンセシス - 様々な音響合成の手法を学ぶ
- * ライブパフォーマンス 1: PA 入門、PA で音を出してみる
- * SuperCollider 2-1: サンプリング & プレイバック
- * SuperCollider 2-2: サウンドの分析と再合成
- * ライブパフォーマンス 2: 1分ライブパフォーマンス
- * SuperCollider 3-1: 構造をつくる - 反復、リズム、パターン
- * SuperCollider 3-2: 構造をつくる - アルゴリズムによる作曲
- * ライブパフォーマンス 3: グループによる即興演奏
- * SuperCollider 4-1: インタラクティブ - コントロールの仕組み
- * SuperCollider 4-2: インタラクティブ - GUI、自分専用の楽器をつくる
- * 総合製作
- * ライブイベントを企画する
- * ライブイベントの準備
- * 最終講評会

■受講に当たっての留意事項

Mac の基本操作 (マウスの操作、文字の入力、ファイルやフォルダの操作) は理解している前提で授業を行います。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出 (中間課題・最終課題) の内容を総合的に評価します。

■教科書／参考書

授業資料は Web サイト (<http://yoppa.org/>) に掲載します。
"The SuperCollider Book", James McCartney, Scott Wilson, David Cottle, Nick Collins, The MIT Press, 2011
Curtis Roads (著) 青柳龍也 (訳) 後藤真孝 (訳) 『コンピュータ音楽 - 歴史・テクノロジー・アート』東京電機大学出版局、2001 年
Nicolas Collins (著) 久保田晃弘 (監訳) 船田巧 (訳) 『Handmade Electronic Music 手作り電子回路から生まれる音と音楽』オライリージャパン、2013 年
小瀬高夫、須藤浩 『PA 入門 [改訂版] 基礎が身に付く PA の教科書』リットーミュージック、2012 年

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	デジタルサウンド演習 Digital Sound			
教員名	畠中 実			
開講時期	後期	火曜 4	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

「サウンド」をテーマとする芸術について学ぶ。美術においては 20 世紀初頭より騒音芸術や音響彫刻において「サウンド」の再考が始まり、こうした流れは後に実験音楽やメディア・アート等と交差しながら、現在は「サウンド・アート」と呼ばれる横断的ジャンルが形成されるに至った。本講義ではこうした流れを 20 世紀以降の美術、音楽双方の文脈から、その前史や周辺を含めつつ考察していく。また現代のテクノロジー、メディア環境、聴覚文化の状況をこれに重ね合わせ、議論の拡張を試みる。歴史、状況論に加えて、作家論や美学、批評的アプローチも考慮したい。さらに、美術や音楽以外にも、映像やパフォーマンス、ポピュラー文化等、関連する「サウンド」実践についても随時取り上げたいと考えている。

■授業計画及び内容

講師には現在活動する作家も加わる予定である。学芸員、作家、研究者という異なる視点から、「サウンド」というテーマをもつ芸術に関わる多様な手法や議論を取り上げていく。実際に音源やパフォーマンス、インスタレーション等の映像を聴きながらの講義に加えて、作家によるワークショップ形式も取り入れる。また期間中、芸術情報センターにて本講義に関連する展示も開催する。

■受講に当たっての留意事項

授業の進捗状況等により授業計画及び内容は変更することがある。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出等の内容を総合的に評価する。

■教科書／参考書

担当教員の執筆したものなどを中心に使用しながら、授業中にも随時紹介する。
参考書：
マイケル・ナイマン著『実験音楽 ケージとその後』水声社、1992 年
ポーリン・オリヴェロス著『ソニック・メディテーション 音の瞑想』新水社、1998 年
R・マリー・シェーファー著『世界の調律 サウンドスケープとはなにか』平凡社ライブラリー、2006 年
アラン・リクト著『サウンドアート 音楽の向こう側、耳と目の間』フィルムアート社、2010 年
など
ICC カタログ：
『サウンディング・スペース 9つの音響空間』NTT 出版、2003 年
『サウンド・アート 音というメディア』NTT 出版、2000 年
『サイレント・ダイアログ 見えないコミュニケーション』NTT 出版、2008 年

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	ジェネラティブ・デザイン演習 Generative Design		
教員名	金田 充弘、土岐 謙次、豊田 啓介、 岩岡 孝太郎、大野 友資		
開講時期	前期	水曜 4・5	単位 4
履修対象	学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

デジタルな環境でのデザインとそれをベースにしたデジタルファブリケーションが一般化しつつある中で、デジタルテクノロジーを使ったモノ作りの現在と今後の可能性についての理解を深め、自分の制作に活かす手法を学ぶ。
異なる分野の専門家によるゲストレクチャーを含むオムニバス形式の授業とソフトウェア演習・製作演習を行う。

■授業計画及び内容

■受講に当たっての留意事項

■成績評価方法

■教科書／参考書

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	コードとデザイン Design by Code		
教員名	桐山 孝司、渡邊 淳司、藤木 淳		
開講時期	後期	水曜 4・5	単位 4
履修対象	学部生・大学院生		
特記事項			

■授業テーマ

3D のプログラミング環境を用いた実践的なモデリングと同時にデジタルファブリケーションの特性への理解を深め、多様なデジタルインプット及びアウトプット手段と連携させる手法を学ぶ。さらに、デジタルファブリケーションを物質化・外在化の装置と考えると、時間や空間、動きといった概念、さらには、その人間の認知の問題を、触れることのできる物体として提示することができる。このような視点からデジタルファブリケーションをとらえなおし、異なる分野の専門家によるオムニバス形式の授業を行う。

■授業計画及び内容

◎素材としてのコンピュータ（久保田晃弘）

- ・「コード」から「色」や「かたち」を生成する
- ・数と知覚のインターフェイス / グリッチの美学

◎コードと視覚化（桐山孝司）

- ・画像処理の理論を知り、映像から差分やオブティカルフローを視覚化する。
- ・機械学習の理論を知り、属性の集まりから分類を作る。
- ・接続グラフの理論を知り、GraphViz を使ってグラフの構造を視覚化する。
- ・XML の構造を知り、SVG でグラフィックを描画する。

◎記号接地（渡邊淳司）

- ・感覚のホムンクルス化：感覚の感度によって身体部位の大きさを変化させた自身の身体像を作成する。
- ・動きの物質化：人間の運動知覚の特性を時空間図で表現し、新たな運動の物質化の方法論を探る。
- ・触れるパターンの記号化：規則的な触覚パターンを作成し、そこから触覚言語の可能性について議論を行う。
- ・立体空間の中での文章：文字情報を組み込んだ立体物の制作を行い、文章の意味の変容を観察する。

◎マテリアライゼーション概論（藤木淳）

- ・現象のスケッチ：ボールペンやマジックなど濃度が筆圧等に依存しない文房具で現象（「ぼかし」等）を伴う対象を表現する
- ・現象の立体化：ブロックソフトで現象を伴う対象を表現する
- ・現象の具現化：「現象の立体化」で生成したモデルを 3D プリンタから出力し、具現化された現象物を観察する
- ・現象のコード化：現象を文字や数式で記述し、現象について議論、考察する

■受講に当たっての留意事項

授業の進捗状況等により授業計画及び内容は変更することがある。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出の内容を総合的に評価する。

■教科書／参考書

- ・渡邊淳司（編著）、田中浩也、藤木淳、丸谷和史、坂倉杏介、ドミニク・チェン『いきるためのメディア 知覚・環境・社会の改編に向けて』（春秋社、2010年）
 - ・ケーシー・リーズ他著、久保田晃弘監訳『FORM+CODE デザイン／アート／建築における、かたちとコード』（BNN、2011年）
 - ・マニュエル・リマ著、久保田晃弘監訳『ビジュアル・コンプレキシティ 情報パターンのマッピング』（BNN、2012年）
- この他にも授業中に随時紹介する。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	サウンド・デザイン概論 Sound Design			
教員名	長瀧 寛幸、古川 聖、野平 一郎			
開講時期	前期	火曜 4	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■教科書／参考書

教材、参考書は適宜、配布ないし指定する。

■備考（オフィスアワー）

■授業テーマ

現代の芸術表現全般に関わる音響に関して、音楽、美術、映像それぞれの立場から、実践的な事例を基に、身体、メディア技術、理論をサウンド・デザインという観点から講義する。

■授業計画及び内容

◎長瀧寛幸（5回）

- ・映画におけるサウンドデザイン？ウォルター・マーチを出発点として
- ・作品解説 石井岳龍監督『エンジェル・ダスト』、青山真治監督『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』
- ・作品解説 黒沢清監督『ビューティフル・ニュー・ベイエリア・プロジェクト』
- ・作品解説 シニギワ『Roadside Picnic』
- ・携帯メディアを用いたサウンドデザインの可能性
- *講義には8chサラウンド・スピーカー・システムを使用する。

◎古川聖（5回）

- ・研究と創作（1）：古川研究室は東大／理研の岡ノ谷情動情報プロジェクトと共に、東京大学、筑波大学、東京電機大学、理化学研究所と共同研究を行っている。メンバーは研究者とアーティストから構成され、科学の側、芸術の側からも発想するダイナミックな研究が行なわれている。科学的な研究をどのように創作へ生かしていくか、研究、アプローチを紹介しながら解説する。紹介する研究：「言語と音楽」、「言語と音楽」、「音楽の文法」、「認知バイアスと音楽の生成」、「悲しい音楽はない」など。
- ・研究と創作（2）：「Brain dreams music」プロジェクトの紹介。脳波の実時間解析と音楽的想起内容の分別、音響化、視覚化のためのシステムの開発プロジェクトとそれをつかっ作品、「it's almost a song…」の解説、実演を行う。
- ・研究と創作（3）：認知論的音楽論とそれに関係する現在開発中の「GESTALT-EDITOR」の解説と実演。音楽構造からの音楽生成のモデルを構築するための前提として、既存の音楽理論や音楽構造に関する考え方を認知科学の視点から整理してきた。最新の研究成果では脳内の音楽機能は分散されていることが知られており、音楽を全体としてとらえる視点と共に、音楽の諸要素を脳の音楽の諸認知機能と関係づけながら分けて検討する事も重要である。ここでの考察は必然的に従来の音楽理論を拡大し、認知音楽理論とも呼ぶべきもを指向する事になった。
- ・数による音楽：想像力のためのツールとしてのコンピュータ。1990年代から2006年にかけて、様々なアルゴリズム作曲（音楽をモデル化、数式化し音を生成する）をおこなった。それらをまとめCD「数による音楽」として出版したが、そこで使われた方法や作品を問題点とともに紹介、検証する。
- ・音楽とインタラクティブアート：視覚、聴覚、身体など複数の感覚の共同作用によるマルチモーダルな新しい表現についていくつか自作の品をインタラクティブアートを中心に Small-fish, Bubbles, Activ Score Notation (ASN), To the Unborn Gods etc….

◎野平一郎（4回）

- ・私の作品でのコンピュータの扱い 私の作品に影響を与えた過去の作品（総論）。
- ・2013年7月に初演の制作中の作品（ピアノ、室内オーケストラと電子音響のための「聖杯の城への道」）について そのコンセプトとコンピュータ。
- ・ピアノと電子音響のための「ベートーヴェンの記憶」について（1）そのコンセプトと制作過程について。
- ・ピアノと電子音響のための「ベートーヴェンの記憶」（2）作品の演奏と質疑応答。

■受講に当たっての留意事項

授業の進捗状況等により授業計画及び内容は変更することがある。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出の内容を総合的に評価する。

授業科目名	映像演習 I 映画 Film Production			
教員名	長寫 寛幸			
開講時期	前期	火曜 5	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

現在のあらゆる芸術表現において、映像は表現の記録装置としても、表現の一部としても、あるいは表現そのものとしても不可欠な存在となった。本演習では、20世紀の映像表現を牽引した「劇映画制作」の行程を学ぶことから、映像制作の実践的知識と技術の習得を目指す。具体的にはグループごとに1分間の劇映画作品を製作する。

■授業計画及び内容

- 第1回：オリエンテーション（長寫寛幸）
- 第2回：映画美術概論（磯見俊裕）
- 第3回：映画撮影／照明概論（柳島克己）
- 第4回：映画編集概論（筒井武文）
- 第5回：映画監督概論（加藤直輝）
- 第6回：脚本技術ワークショップ（大石三知子）
- 第7回：撮影基礎（カメラ撮影について）（飯岡幸子）
- 第8回：撮影／照明技術ワークショップ（飯岡幸子）
- 第9回：撮影／照明技術ワークショップ、脚本チェック（飯岡幸子、大石三知子）
- 第10回：映像編集基礎（ノンリニア編集について）（横山昌吾）
- 第11回：編集技術ワークショップ（横山昌吾）
- 第12回：編集技術ワークショップ（横山昌吾）
- 第13回：作品制作指導（加藤直輝、横山昌吾）
- 第14回：作品制作指導（加藤直輝、横山昌吾）
- 第15回：講習会、総論

■受講に当たっての留意事項

学部、学科、学年、大学院を問わず参加可能。
授業の進捗状況等により授業計画及び内容は変更されることがある。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出の内容を総合的に評価する。

■教科書／参考書

教科書／参考書は適宜、配布ないし指定する。

■備考（オフィスアワー）

授業科目名	映像演習 II アニメーション Animation			
教員名	岡本 美津子			
開講時期	後期	火曜 5	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

アニメーションは、用いる素材やキャラクター、ストーリー、音声等により成り立つ複合化された総合芸術である。これらの多様なアニメーション世界を俯瞰し、体系化する試みとして、その歴史、表現技法や演出手法、プロデュース等にフォーカスをあて、作品を分析し、作品制作の企画・構想を得ていく。

■授業計画及び内容

- 第1回：オリエンテーション（岡本美津子）
- 第2回：平面アニメーション① アニメーション原理（山村浩二）
- 第3回：平面アニメーション② 現代アニメーション史（山村浩二）
- 第4回：研究・理論① ワークショップ（布山タルト）
- 第5回：企画・プロデュース① ヒューマンソース（岡本美津子）
- 第6回：立体アニメーション① パペット（伊藤有壱）
- 第7回：立体アニメーション② カットアウト（伊藤有壱）
- 第8回：平面アニメーション③ 技法とプロセス（1）（山村浩二）
- 第9回：平面アニメーション④ 技法とプロセス（2）（山村浩二）
- 第10回：立体アニメーション③ ミクスト・メディア（伊藤有壱）
- 第11回：立体アニメーション④ 3DCGと立体視（伊藤有壱）
- 第12回：研究・理論② 初期アニメーション史（布山タルト）
- 第13回：研究・理論③ アニメーション研究（布山タルト）
- 第14回：企画・プロデュース② メディア設計（岡本美津子）
- 第15回：企画・プロデュース③ ソーシャル・コミュニケーション（岡本美津子）

■受講に当たっての留意事項

学部、学科、学年、大学院を問わず参加可能。

■成績評価方法

平常点

■教科書／参考書

参考文献は適宜、配布ないし指定する。

■備考（オフィスアワー）

参加予定教員： 岡本美津子、山村浩二、伊藤有壱、布山タルト ほか
ゲスト適宜

授業科目名	アーカイブ概論 Archive			
教員名	藤幡 正樹、石田 英敬、西 兼志、 上崎 千			
開講時期	前期	月曜 5	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

アーカイブとは、一般的にさまざまな記録や資料をひとまとめにして保存することをいいますが、昨今「アーカイブ」があらためて話題になっている理由のひとつは、デジタル・メディアによって2次情報が自由に扱える点があります。デジタルデータにすることで、人間の想像出来る量を越えた大量のデータが扱える時代が到来し、あらたな情報のオーガナイズの方法開発が求められています。一般的な情報の扱いとは、内容をカテゴリーに別けること、あるいはオントロジーと呼ばれる情報の階層構造化のことをさしますが、すでにあるカテゴリーにとらわれることなく、あらたな組織化によって生まれる知的空間の持つ価値は注目に値します。

■授業計画及び内容

藤幡正樹 (2回)

・2回に分けてワークショップを行う。出席者の好き嫌いからはじめ、その理由を元に上位概念を抽出し、出席者の母集団が持つ指向性を探つてゆく。

石田英敬 (2回)

・「アーカイヴ」の思想
フーコーの「アルケオロジー」、デリダの「アーカイブ病」などについて、「普遍的アーカイヴの時代」(フーコー)の問題を扱う回
・「図書館」と「アーカイヴ」について、ハイブリッド図書館の建設を推進するアーカイヴ・アーキテクトとしての「情況への発言」。放送人の会の実践について。

西兼志 (2回)

・テレビ研究とアーカイブ (1) (2)

上崎千 (5回)

・アーカイヴと芸術作品 (導入と問題設定)
・分類と一覧化、あるいは「レイアウト」について
・アーカイヴと「断片」/ アーカイヴと「反復」
・アーカイヴと「類似」/ アーカイヴと「場所」
・出来事 of 非永続性 (儚さ ephemerality) と「記録」についてほか。

■受講に当たっての留意事項

授業の進捗状況等により授業計画及び内容は変更することがある。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出の内容を総合的に評価する。

■教科書／参考書

教材、参考書は適宜、配布ないし指定する。

■備考 (オフィスアワー)

授業科目名	情報プロデュース概論 Media Produce			
教員名	藤幡 正樹、松井 茂			
開講時期	後期	月曜 5	単位	2
履修対象	学部生・大学院生			
特記事項				

■授業テーマ

情報技術の進展と共に、アーティスト自身の情報発信と編集に関する能力が求められている。特に国内外の展覧会、フェスティバルでアーティストがキュレーターやプロデューサーを務めるケースも増え、“プロデュース”は作家活動に必須な教養となっている。芸術表現全般に関わる情報をいかに編集し、発信し、新たな活動をつくりだすことをできるのか？ 情報を活用する芸術活動の実践的な事例を、国内外で活躍するキュレーターやプロデューサーを招聘し、オムニバス形式で講義を行う。作家個人のポートフォリオから、グループ展、フェスティバルの企画まで、様々なレベルでの情報リテラシーをテーマとしている。

■授業計画及び内容

毎回、ゲストとして、アーティスト、キュレーター、プロデューサー、編集者を招いたオムニバス形式で行う。詳細は講義の際に告知する。

■受講に当たっての留意事項

授業の進捗状況等により授業計画及び内容は変更することがある。

■成績評価方法

出席数、履修態度、課題提出等の内容を総合的に評価する。

■教科書／参考書

教科書、参考書は適宜、配布ないし指定する。

■備考 (オフィスアワー)